笠戸小学校百年史

笠戸小学校校歌

一　七つの浦の海青く
　　潮鳴る音を聞きながら
　　島で生れた海の子が
　　元気な力くみあわせ
　　ゆるがぬ笠戸小学校

二　緑石みさき松こゆく
　　緑の風が吹く中を
　　島で育つた風の子が
　　素直な心よせおおて
　　たゆまぬ笠戸小学校

三　太華の山の空とおく
　　ま白い雲が流れとぶ
　　島で鍛えた強い子が
　　明るい希望語りつつ
　　のびゆく笠戸小学校

昭和三十二年十一月十日
作詞　山口県副知事　橋本正之
作曲　海上自衛隊東京音楽隊長　片山正見

歴代学校長

初代
三代
古本多助

二代
福谷寅吉

四代
村井又四郎

五代
吉本遠次郎

六代
田村正作

七代
藤井真作

八代
藤井民部

九代
田村政次

十代
下村軍次

十三代
岩本熊蔵

十二代
為久恒介

十一代
中倉　勉

十六代
角　為一

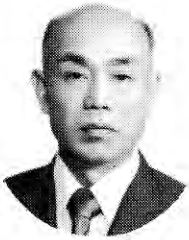
十五代
井上　勲

十四代
藤井　勝

十九代
勢一輝雄

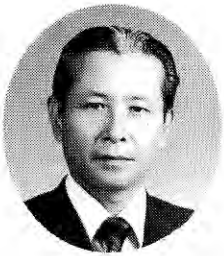
十八代
木原　博

十七代
倉田照雄



二十二代

佐々木 雄 造



二十一代

藤 沢　　博

二十代

好 山 者 住

序

下松市長　藤田徳一

笠戸島は古く鎌倉時代から、瀬戸内海における海上交通の要衝として栄えた。伝統的地方文化と、全国稀に見る自然景観のすばらしさとが相まつなかでわが国教育制度が確立された学制頒布後、間もない明治十年、当時の笠戸本浦の人々の教育にかける情熱と深い愛郷の精神に支えられて創立され、爾来、歴代校長ならびに教職員に人格、識見ともに卓越した方々を迎え、明治、大正、昭和と激動の一世紀を学校、地域が一体となつて人づくり一筋に鋭意努力され、ここに創立百周年を迎えられましたことに対し、関係各位に深甚なる敬意を表しますとともに心からお喜びを申し上げるものであります。

昭和四十五年笠戸大橋の完成を契機に県下のレクリエーションの中心的役割を果す笠戸島として時代の脚光をあび、今後の飛躍的発展に大きく期待がよせられるに至りました。

こうした時期に創立百周年を迎えられ記念事業として記念誌が編集され、百年史の真実が笠戸本浦の文化遺産として多くの方々によつて後生に引き継がれ、将来への発展の基盤となることを祈念してやみません。

序

下松市教育長　清　木　幹　丈

笠戸小学校が校運隆々として、ここに創立百周年を迎えられましたことは、まことに慶賀の至りでありまして、心からお慶びを申し上げます。

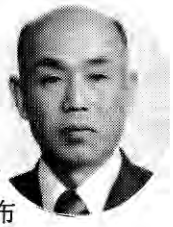
顧みますと、我が国に学制が発布されましたのは明治五年であり、教育制度の近代化、国民皆教育の基盤が、ここに確立されたのでありますが、それから五年後の明治十年三月三日、笠戸小学校が開校されたのであります。

ひと口に百年と申しますが、この長い一世紀は、我が国にとつては、まさに激動の時代でありました。教育界においても、幾度かの学制の改革の中で、笠戸小学校は、つねに、あるべき教育の真実の姿を求め、営々としてその努力を傾けられ、今日までに一千三百余名の卒業生を世に送り、多くの人材を輩出してきたその実績は、高く評価されるところであります。このことは、歴代校長先生をはじめ、地域の方々のひたむきな教育への熱情と高い識見の賜であると、深く敬意を表するものであります。

特に、戦後の激しい時代変遷の中で、次第に過疎化する地域の現状をふまえた、少人数学級における学習指導の研究とその実践については、不断の努力を重ねて、年々すぐれた成果をあげられ、真の教育のあるべき姿を実現してこられましたことは、等しく世の刮目するところであります。

「豊かな県づくりのもとは人づくりである」と考えられ、優先して、教育の振興発展に努力されたのは、笠戸の大先覚である前山口県知事・故橋本正之氏であります。

このたびの意義ある百周年を契機とされ、故橋本正之氏の心を心として、歴史と伝統に輝く笠戸小学校の一層のご発展を心から祈念してお祝いのことばといたします。



発刊によせて

校長　佐々木　雄造

日本の夜明け、すなわち、明治維新以後教育の重要性がさけばれ、明治五年学制が発布され、笠戸小も明治十年三月三日、一分教場として開校いたしました。以来、幾多の変遷を経て、ここに創立百周年の輝かしい年を迎えるに至りましたことを、深く喜びとするところであります。この間、千三百有余名の卒業生を送り、年とともに、よき伝統、美しい校風を創りあげてまいりました。明治、大正、昭和とその時代の潮流の中で、雄々しく、而も堅実な教育の歩みをつづけた笠戸小学校の、今日の、この姿を眺めますとき、誠に意義深きものがあると考える次第であります。

笠戸小教育は、この百年の息吹を受けて、郷土の発展、充実のため、その一翼をになつて、今後、更に大きく飛躍していかなければなりませんが、その底にあつて、これを支えるものは、この笠戸の地を愛する誠実な心と、地区民の和であろうと思います。そして、地区の方々の教育への情熱と、愛情がこの輝かしい伝統を受け継ぎ、新しい時代を背負う子ども達の育成に、力強いエネルギーになることと思います。

ここに、笠戸小学校のあゆみを振りかえり、将来の笠戸小をよりよく築きあげる糧としたいという願をこめて、この百年誌を編集することになり、同時に同窓生名簿作成にも全力をあげた次第です。

笠戸小校区の方々、卒業生の皆さん、教育こそあらゆる生産の源であることを深く認識されまして、この冊子が笠戸小を中心とした本校区の歴史を後世へ伝えるものであり、又未来への大きな夢のよりどころとして、大いなる理想、高き目標の達成のためのささやかな資料として生かされるならば、よろこびこれに過ぎるものはありません。

この記念誌編集にあたり、実行委員会のご尽力は勿論、地区の方々の絶大なるご協力、ご援助に対し、心から厚くお礼を申しあげると共に、笠戸小、並びに校区のますますの発展と隆昌をお祈り致します。

序

笠戸小学校創立百周年記念事業
実行委員長　ＰＴＡ会長　土　本　　薫

このたび笠戸小学校の栄ある創立百周年を迎え、これを記念するにあたり、笠戸地区の方々をはじめ学校当局の並々ならぬご協力のもとに、記念誌の編さん、同窓会名簿の作成がなされ、心から感謝を申しあげます。

顧りみますと、明治の改革の波はその希望を運びよせ、小規模校なれど、将来への限りなき飛躍を希う学校と地区民の熱意は、爾来、いくたの変遷を経て、記念すべき百周年という意義深い年をもたらしたのであります。

山々の緑、波静かに流れる潮の碧、しま模様の田畑とともに、穏健にして勤勉なる笠戸地区民の純粋な心は、近代日本の高度成長と激動の中にあつて、なお不変のものをもち続けております。

この素晴らしい郷土笠戸の象徴として起ち、親しまれ、親和の接点なる我等が笠戸小学校は、また、下松市当局並びに教育委員会、関係諸先生、先輩のご指導、ご助力のもとに教育施設、環境整備充実の、その基から、幾多の有為英才を育成輩出し得たのであります。

この伝統ある笠戸教育の一節をしめくくり、無限の未来へ進展の礎となし、次世にはばたく若き世代の心の糧となすべく記念行事が遂行され、日本国勢の一役を担い、小学校を中央に囲む美郷笠戸こそ、百年を祝う真の姿であると、なおいつそうの感激を呼ぶものであります。

この記念に際しご尽力をお寄せいただきました、下松市、教育委員会をはじめ、学校諸先生および関係各位に対し、心からなる敬意と感謝の意を表わす次第でございます。

目次

第一編　郷土誌

はじめに……1

一、笠戸島の変遷……4

下松地区名のうつりかわり……4

(一)末武南村　笠戸島……5

二、校区の概況……6

(一)位置と地勢……6

(二)土地の生成……7

(三)気候……7

(四)地名（風土注進案より）……7

(五)人口……11

(六)職業の変化……12

(七)宗教……12

(八)産業……14

(九)交通・通信……21

(十)笠戸郷土年表……21

第二編　教育誌

一、笠戸小学校沿革……29

(一)寺小屋・私塾から笠戸小学校へ……29

(二)笠戸小学校開校後の沿革……29

(三)下松市教育百年の歩み……43

二、笠戸小学校の現況……43

(一)本校の教育目標……43

(二)学校経営の方針ならびに具体的施策……43

(三)本年度の努力点……44

(四)校内研修……46

(五)教育課程の編成・運用の基本事項……47

(六)PTA活動……48

三、学校の状況……49

(一)位置……49

(二)校地・校舎……49

(三)児童数……49

(四)特別活動担任……49

(五)部団担任……50

(六)校時表……50

付　笠戸小学校平面図・写真……51

四、卒業生の思い出……70

第三編　卒業生名簿・職員名簿……75

付　笠戸小学校創立百周年記念事業

参考文献一覧

編集後記

第一編

郷土誌

はじめに

下松市は山口県の南東にあつて瀬戸内海に面しています。東は光市と熊毛町、北と西は徳山市につながつており、南は笠戸湾にのぞんでいます。

昭和一四年一一月三日、当時の下松町を中心に、花岡村、久保村、末武南村を合併して、全国で一五三番目（現在の全国の都市の数六四四）、山口県下では下関、宇部、山口、萩、徳山、防府につぐ七番目の都市として人口三三、一二二人、面積六二・八七平方キロメートルの下松市が誕生しました。その後、昭和二九年一一月一日に都濃郡米川村を、昭和三七年四月一日には都濃郡都濃町滝ノ口部落を編入合併し、こんにちでは人口五万六千人、面積八八・六三平方キロメートルの都市となりました。

下松という地名の由来は、伝説によると、推古天皇のころ、鷲頭荘青柳浦にあつた鼎（かなえ）の松（下松駅北に所在した。）に大星が天降り、そのとき占者に神がかりがあつて、「やがて百済（くだら）の皇子が来朝する。自分はその警護にきた北辰の精だ。」と告げました。お告げの中の百済の皇子は、大内冢の祖先とされ「琳聖太子」で「下松」は、降（くだ）り松」の転化したものだといわれています。また一説では百済との交易の地「百済津（くだらつ）」、また、百済の人の待つという意味で「百済待（くだらまち）」が転化して「くだまつ」となつたともいわれています。

下松市は、古くから漁村を兼ねた塩田集落として、また、貿易港として栄えてきましたが、市制施行前の大正七年一二月に笠戸島に笠戸造船所（現在の笠戸船渠）が設立され、大正一〇年二月には日立製作所が車両工場の操業をはじめ、さらに昭和五年四月に日本石油下松製油所（現在の日本石油精製）、昭和九年四月に東洋鋼鈑下松工場があいついで立地し、これら大工場の関連企業の進出によつて臨海工業都市としての形態を整え発展しました。しかし第二次大戦のツメ跡は下松市にも大きく残り、終戦の年の昭和二〇年六月と七月に米機は下松市の工業地帯を空襲、多くの死傷者を出しました。

終戦後、平和産業もやつと軌道にのりはじめた昭和二五年一月、太平洋沿岸のトップを切つて日本石油が操業、原油船の第一便が下松港に入港するなど

工業都市の息吹きをみせました。昭和三〇年一二月に貯水容量四五二万トンの温見ダムが完成、昭和三九年九月には周南工業整備特別地域の指定を受け、昭和四〇年四月における徳山下松港の特定重要港湾の指定など、着々と臨海工業都市としての基盤整備がすすみ、こんにちでは各種産業車両、化学プラント、ブリキ、薄板、石油、造船、金属加工、機械部品、住宅関連産業などの大企業と関連中小企業や中国電力火力発電所が立地し、多角的な重化学工業都市としてめざましい成長発展を遂げるにいたり、昭和四九年一〇月に埋立造成が完了した恋ケ浜臨海工業用地への日立製作所および日本石油精製ならびに中小企業の立地は、下松市の工業力をさらに充実拡大させようとしています。

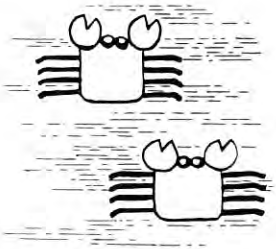
また、下松市の工業都市としての発展と都市化の進行は、労働力の伸長をきたし、住宅需要は急速に伸びて住宅団地の開発が盛んに行われ、周南地域のベッドタウンとしての役割りも持つようになりました。

こうした工業化と都市化の反面、昭和四六年頃から急速に環境問題がクローズアップされてきました下松市は環境保全に対する施策を積極的にすすめるため、国や県の施策のみならず、独自の施策として昭和四六年三月には五大企業（日立製作所、東洋鋼鈑、日本石油精製、笠戸船渠、中国電力）と公害防止協定を締結し、昭和四七年一〇月には緑化関係条例を設けて緑の保存、緑の造成、緑の市民運動を推進し、昭和四八年一月には五大企業と工場緑化協定を締結し、さらに同年四月開発行為等指導要綱を設けて開発事業者に乱開発の防止と環境保全を義務づけることとしました。

一方、すばらしい自然環境と観光レクリエーションの資源に恵まれている瀬戸内海国立公園笠戸島には、昭和四五年一一月に笠戸架橋が実現し、これを契機に笠戸島には上水道がゆきわたり、道路、国民宿舎　大城　、ハイキングコース、遊歩道、白浜キャンプ場、白浜海水浴場などが整備され、昭和五〇年四月には勤労者綜合福祉センター　笠戸島ハイツもオープンし、近くには人工海水浴場も既に着工し完成目前であり、今後の観光レクリエーション施設

の整備によつて、下松市はもちろん周南地域住民の健全な憩いの場として大きな期待がよせられるようになりました。

臨海工業都市の特性を持ち、自然環境と観光レクリエーションの資源に恵まれた笠戸島を持つ下松市は、環境の保全・創造・教育・文化の向上、高福祉社会をめざした老人福祉や児童福祉、さらに生活基盤の整備促進など、個性と魅力ある豊かな都市の実現をめざして絶えまざる努力をつづけております。



一、笠戸島の変遷

下松地区名のうつりかわり

註　天保一二年風土注進案、の欄において村名を（　）で囲むものは徳山支藩の風村村名の上に○を付するものは前山代宰判の風村

都濃郡宰判町村沿革一覧

郡	慶長一五年検地帳	寛永二年検地帳	元文五年地下上申	天保一二年風土注進案	明治六年大小区制	明治一二年郡区町村制	明治二二年市町村制	その後の異動	昭和三九年現在
熊毛郡		大河内	大河内村	大河内村	六ノ九	大河内村	勝間村	昭和三一・一〇・一勝間・八代・三丘・高水四村合併熊毛町	熊毛町
熊毛郡	三井村 新屋河内	三井 新屋河内	三井村	三井村	六ノ八	三井村	三井村	昭和一四・四・一島田・三井との四村合併周南町 昭和一五・一〇・一光町改称	昭和一八・四・一室積町を合併市制施行 同三〇・七・一周防村を合併 光市
熊毛郡	浅江	浅江	浅江村	浅江村		浅江村	浅江村		
都濃郡	切山村	切山	切山村	切山村	七ノ一	切山村	久保村	久保村	昭和一四・一一・三下松町、久保村、末武南村及花岡村を合併し市制施行 昭和二九・一一・一米川村編入 下松市
都濃郡	山田村	山田	山田村	山田村		山田村			
都濃郡			来巻村	来巻村	七ノ二	来巻村			
都濃郡	河内保	河内保	河内村	河内村		河内村			
都濃郡	豊井保	豊井村 相島	豊井村	豊井村	七ノ三	東豊井村 西豊井村	豊井村		
都濃郡			笠戸島	笠戸島	七ノ四	笠戸島	末武南村		
都濃郡	末武村	末武村	末武村 貞享四年開作	平田開作村		平田村			
都濃郡				末武下村の内笠戸島		末武下村			
都濃郡				末武下村					
都濃郡				末武上村	七ノ五	末武上村	末武北村		
都濃郡				末武中村	七ノ四	末武中村			
都濃郡	生野屋	生野屋	生野谷村	生野屋村	七ノ一	生野屋村			
都濃郡		須々万の内下谷	下谷村	下谷村	七ノ九	下谷村	米川村	昭和一四・四・一花岡村改称	米川村
都濃郡	瀬戸	瀬戸	瀬戸村	（瀬戸村）		瀬戸村			
都濃郡	温見村	温見村	温見村	（温見村）		温見村			
都濃郡	大藤谷	大藤谷	大藤谷村	（大藤谷村）		大藤谷村			

昭和一〇・一〇・一五徳山町に市制施行 同一七・四・一久米村及加見村編入、同一九・四・一櫛浜町戸田村、湯野村、大津島村、夜市村、富田町を合併

(一) 末武南村　笠戸島

笠戸島は、建武三年に、三浦介という人にだした尊氏の手紙文から、かなり古くから知られていた島であることがわかるし、末武南村に属していたことも、大抵の人が知つているのであるが、南村を中心にした歴史を前表を元にして解しておく。

◇ 都濃郡

長州藩における、郷村支配の中間組織として管轄する区域で、宰判というが、これが郡と同義語で、現在も都濃という役所組織がある。

◇ 四欄、地下上申（じげじようしん）

元文五年（二三七年前）、地下上申によつて、はつきり記録された姿を表わしている。

地下上申とは、享保から元文、寛保、延享、寛延、宝暦年間にわたつて萩本藩が本藩、支藩の全領域の村庄屋から差出させた、村絵図を含む統一的村明細帳の総称で、天保期の「風土注進案」に先行するもの。

◇ 五欄、風土注進案

天保一二年（一三五年前）・藩主、毛利敬親公が、当時の碩学に命じて、全宰地の風土を記録編集せしめたもので、彼等は約四年間、寝食を忘れてこれを作りあげたという。

各村は、藩制により花岡と徳山に支藩を置き、各々の管轄村に代官を派出して管理していたが、本島はここで末武下村に属したことがわかる。

◇ 六欄、廃藩置県制

明治三年に廃藩置県制が施かれたが、なお旧藩に依存しなければできないことが多く、大小区取扱所という管理体制をもつた。

◇ 七欄、郡区町村制

明治一三年、制度の発布により取扱所は廃止され、大小区制とした、大は都濃郡役所、小は戸長役場と唱え、末武下村、平田村、笠戸島が戸長役場となつた。

◇ 八欄、市町村制

明治二二年に、制度が実施され、二ケ村（末武下村・平田村）一島（笠戸島）を合し、これを字となして末武南村となつた、以後、昭和一四年市制施行まで、字末武南村笠戸島として約五〇年を経た。

二　校区の概況

(一)　位置と地勢

下松市は、山口県の南東にあつて、瀬戸内海に面し、東は光市と熊毛町、北と西は徳山市に接している。

笠戸島は、瀬戸内海に浮ぶ島で、北部の瀬戸から一五〇メートルへだてた宮の洲と、全長四七六メートルの笠戸大橋で本土と結ばれている。西部は、笠戸湾を置いて徳山市の大島に、東部と南部は、周防灘に面している。

周囲は、約三六キロメートルで海岸線の出入りが激しく、東北より南西に長く伸びており巾はせまい。

面積は、約一一〇〇ヘクタールで大部分が山地である。

笠戸本浦は、笠戸島の中で一番本土に近く、対岸に宮の洲や、笠戸大橋を眺めることのできる浦である。笠戸小学校は東経一三一度五一分二〇秒、北緯三四度〇分五〇秒の位置にあつて、部落のほぼ中央にある。部落の後方にマンガン山と、その西方に岩見山（約二二九メートル）があり、格好のハイキングコースとなつている。

笠戸港は、周防の天の橋立と称せられている宮の洲と、瀬戸岬、寺崎とに囲まれた天然の良港である。

笠戸港は、古くから海路の風待港として栄え、西国諸大名が参勤交代の際、風の都合で運行できないとき、ここに船を停泊させていたようである。その当時は、商取引きもさかんで人家もかなりあつたようである。戦前戦中の時代では、北九州で掘り出した石炭を若松港から、大阪方面へ運ぶ石炭船の寄航地としても栄えていた。当時は、笠戸港を母港として、石炭船の船長として活躍した人も多くいた。それが石油時代となつて、石炭の需要がなくなり船の数もへり今ではわずか一隻を数えるのみとなつた。

現在、海岸には昭和五三年度完成をめざして埋立県道が造成されつつある。完成のあかつきには、バスも桟橋あたりまで乗り入れられる予定である。尾泊の埋立地ケーソンヤードあと地の半分には海浜公園ができ、広いグランドには、子ども会活動で常時使用されている。又その半分は、江の浦ドツクのア

パートが建築される計画である。アパート建築後は笠戸の人口も増え、将来に大きな望みをたくしているといえよう。

(二) 土地の生成

笠戸島は、古生元中の秩父古生層に属しており、尾郷付近には、近生元中の石灰岩が露出し、中央部には、深造岩中の班岩や石英班岩の露出している所がある。地質は、玢岩、花崗岩、玄武岩等より出来ており、田地は、砂壌土、埴壌土で畑地は黄褐色の砂壌土が多い。笠戸本浦付近は、特に玄武岩質の小石を含む灰黒色の壌土より出来ている。

(三) 気　候

気候は、温暖で真夏でも三五度を越えないが、本浦東部落は、夕日を受けて夜半の暑気は甚だしい。

冬も〇度を降ることはまれである。しかし北西の風はきびしい。

参考までに、昭和五一年の下松市の気温と雨量を末尾に示しておきます。

風向は、春は西風を主として南風が、夏は南風を主として東風が、秋は主として北西風が、冬は北西の風を主として東風の日が多い。

天候は晴天の日が二五〇日から二六〇日、雨と曇の日が各五〇日、降雪の日は三・四日にすぎず、積雪はほとんどみられない。

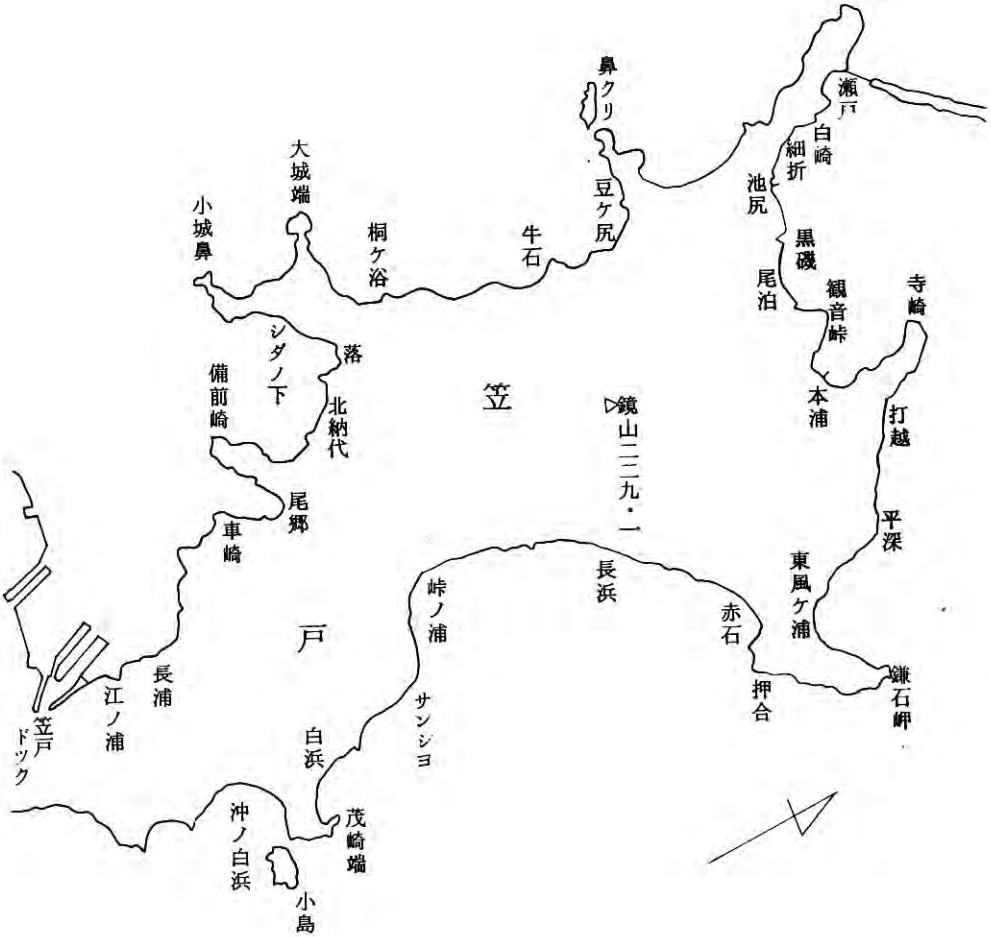
本浦は後方の三方が山に囲まれているため、風向が上空と地上とでは、反対の場合がある。

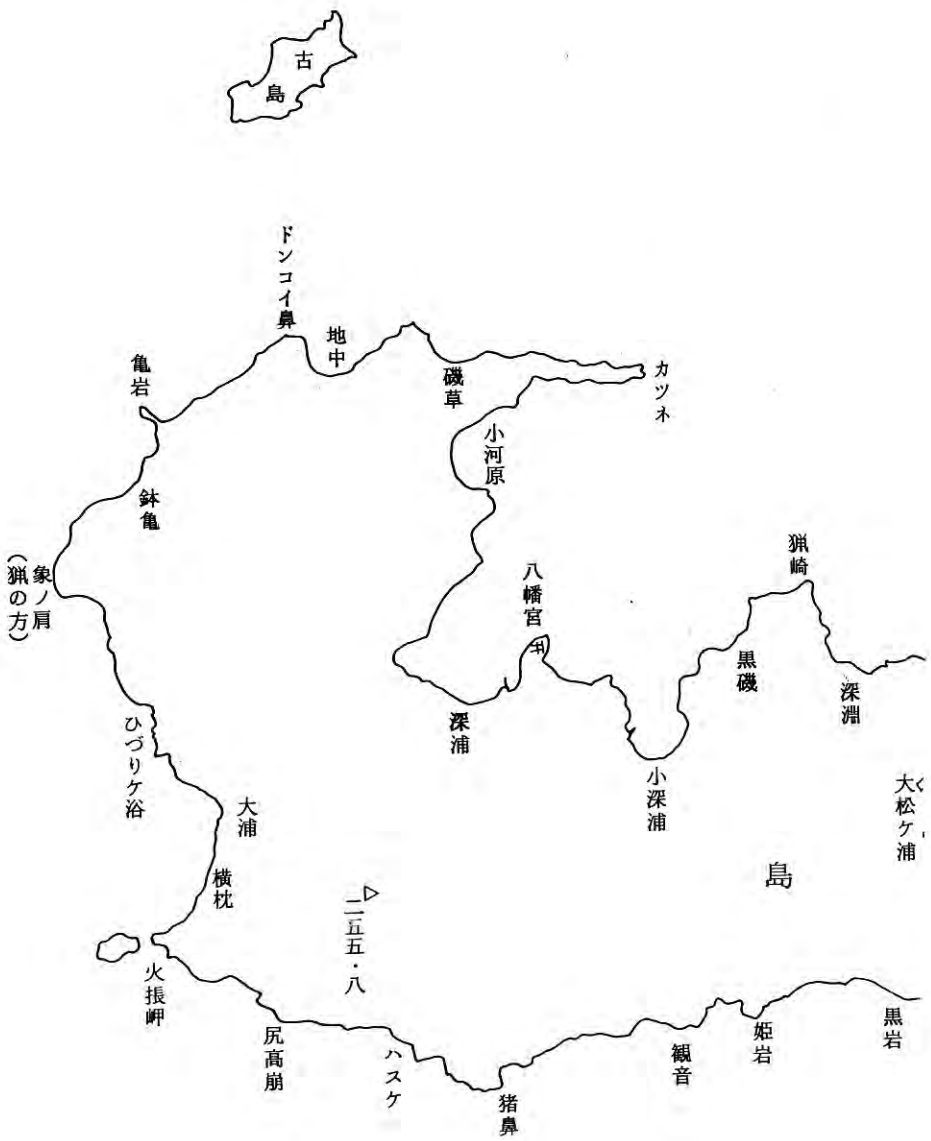
	気　温	雨　量
1	3.7°	12.0mm
2	6.8	171.0
3	8.2	126.5
4	13.1	237.5
5	17.9	243.3
6	21.3	133.0
7	24.8	166.0
8	26.8	120.7
9	20.9	149.0
10	16.8	103.0
11	10.0	49.0
12	6.0	7.20

（右資料は下松市消防本部の観測による）

(四) 地　名（風土注進案により）

風土注進案とは、旧藩主毛利敬親公が、今から一三〇年ぐらい前（天保一二年から弘化三年）に、地方の実態を調査させ作らせたものです。これには、笠戸島の地名がことごとく出ているようで、たいへ


瀬戸
白崎
細折
池尻
黒磯
尾泊
観音峠
寺崎
本浦
打越
平深
東風ケ浦
鎌石岬
鼻クリ
豆ケ尻
牛石
桐ケ浴
大城端
小城鼻
落
シダノ下
北納代
備前崎
尾郷
車崎
笠
鏡山二二九・一
長浜
赤石
押合
峠ノ浦
サンジョ
戸
長浦
江ノ浦
笠戸ドック
白浜
茂崎端
沖ノ白浜
小島


古島
ドンコイ鼻
地中
亀岩
磯草
カツオ
小河原
鉢亀
象ノ肩
(猟の方)
八幡宮
猟崎
黒磯
深淵
深浦
ひづりケ浴
小深浦
大松ケ浦
大浦
横枕
島
二五五・八
火振岬
尻高崩
ハスケ
猪鼻
観音
姫岩
黒岩

んおもしろい。

次に「島の事」の全文を現代文になおし記載しておく。

笠戸御番所（ごばんしょ・今の役所の出先機関にあたる。また鼻ぐりと深浦にそれぞれ小番所があつた。）の前より笠戸浦海辺の人家を西北に行けば、観音峠道まで四丁、それより尾泊・黒磯・池之尻・細折・白崎・瀬戸渡場を通り瀬戸はなまで一五丁ほど、それより南に向い磯づたいに沖池の尻まで一〇丁、それより乾（いぬい・北西）へ向かい鼻ぐりまで九丁、この鼻ぐりという所は、満潮時は、まわり四丁ほどの島になる。その切戸を干戸（ひと）という。

南に向かい豆ケ尻の人家まで五丁ほど西へ向かい九丁ほど行くと牛石という所がある。それより乾へ向かい桐ケ浴を通り城崎というはなに至る。この間九丁ほど、南へ向かい六丁ほど行き小城というはなをまわり南へ七丁ほど行き、しだの下というはなをまわり、三丁ほど行き落しが浦まで三丁。

北網代を南へ七丁ほど行き尾郷という所へ至る。それより西北に備前崎という所をまわり西茶の木という所へ五丁、それより車崎を通り、南に向かい船隠へ出、長浦という　笠戸浦、深浦の境まで八丁、それより江の浦へ出　西へ八丁ほど行き大松ケ浦という、瓢たん田を通り深淵に至る。この間七丁、猟崎という所までまわり、又南へ向かい黒磯という所を通り小深浦へ出る。深浦よりここまで一三丁余りそれより鼓石を通り、八幡宮のはなをまわり深浦へ至る。この所へ一〇丁余り、深浦の人家を過ぎ西ケ浴・堂前田、小河原、黒甲を過ぎ、かすねがはなへ二三丁、礒草を通り知中へ至り、この間一一丁余、それよりどんこいはなを通り、亀岩まで七丁、それより西へあたり一四丁はなれ、古島（ふるしま）をまわり一一丁半ほどの小島あり。この間を間口（まくち）という。

それより鉢亀を通り猟の方へ至る。この間八丁、巽之方（たつみのほう・南東）伽藍・ひづりケ浴を通り、大浦へ至る。この間一〇丁半　右家下より横枕を通り南へ向かい火振崎までこの間三丁余、もつとも火振崎は、満潮の時は小島になる。大まわりは三丁一二間、横巾二五間半あり、切戸になつている

所は三五間半程ある。小船はこのうちを通る。

火振崎松より東へ洞葉ケ浴・鬼燈谷・尻高崩を通り　はすけという所に至る。この間八丁余、右家下より小はすけという所に至る。この間三丁、鴨泊・水落・観音・姫岩・姥ケ谷・梅の木原・黒石・白石などという所を通り、沖白浜へ出る。この所笠戸と深浦の境である。この間二九丁余、それより白浜の小島はなまで五丁、小島より北へ茂崎ケ端まで四丁、それより西白浜へ至る。この間二丁、三桝のはなまで五丁、垰の浦まで六丁、良の方・焼山・横平見をこえ、長浜・赤石・押合など小名あり、鎌崎はなへ至る。この間一九丁、乾へ東風浦まで六丁、しのど・平深・ひら見・曾山など小名あり、打越へ出るまで八丁、寺崎まで四丁、御番所まで三丁あり

惣島地大周廻り（笠戸島の周囲）里数はしめて、八里一四丁ほどある。

島内竪横・西は深浦鉢亀河境より、東は笠戸寺崎はなまで峯尾通り　二里一七丁余、横巾　峠の浦より尾郷まで挾き所五丁四一間、同広き所、はすけの間小名魚之畠より深浦川まで一三丁三六間である。

以上であるが、地図で笠戸島めぐりをするのも、むかしがしのばれて、たいへん懐しいものである。

(五)　人　口

笠戸本浦の人口の実態は左表の通りであるが、終戦後、都市部への就職で若い者は、次第に減少しているが、笠戸大橋の完成により、交通が非常に便利となつたので、これからは徐々に増加するものと思われる。

	昭和二二年	昭和三五年	昭和五二年
男	四二六名		
女	四一五名		
合計	八四一名	七五〇名	六〇九名

(六) 職業の変化

	昭和二二年	昭和四二年	昭和五二年
農業	二五名	二五名	一五名
漁業	二一名	二一名	二二名
会社員	三二名	五五名	六七名
船員	一八名	二名	二名
造船業 運送業	一〇名	七名	七名
商業	三名	八名	八名
鉄工業	三名	ー	ー
建築業	三名	三名	三名
自由業	一九名	一〇名	一九名
神官・僧侶	二名	ー	ー
公務員	三名	四名	八名
その他	五名	五名	一三名

(七) 宗教

笠戸神社

この神社は、大年神・奥津彦神・奥津姫神を主神に、須佐之男命・田心姫命・市杵島姫命・多伎津姫命・誉田別尊（応神天皇）・気長足姫命（神宮皇后）

を配祀しています。この神社は、風土注進案には荒神社とあり祭神は素盞嗚尊で、当地の鎮守です。建造の年代は不明ですが、旧記に寛文九年（一六六九）七月以前と伝えられています。棟札七枚を所属していますが、その最初は元禄二年（一六八九）一一月の再建というから、かなり古い時代の創建であろうと思われます。相殿の八幡宮は享保年中に勧請されたものといわれます。現在名に改められたのは明治四年（一八七一）一二月で、例祭は旧八月一八日、神紋は左三つ巴です。

尚部落のお祭りとしては、春祭は新暦四月一八日で、昔からこの春祭には神舞を奉納したが、現在は中止しておる。秋祭りは、前述の例祭で旧八月一八日である。この秋祭には、御神幸の祭が行われる。

仏教

部落民の大半は仏教（浄土宗）で、下松の浄西寺の壇家である。部落にある「光明寺」は、浄西寺の末寺であるが、現在住職はいない。

なお光明寺の境内には「波切不動明王」の像が建てられており、海の守本尊として有名である。

お大師講

昔から現在も続けており、この講は部落を、東・中・西と三区に分けて各区毎に、当家を決めて、毎月旧暦の二〇日を弘法大師の命日として祈願する行事で、主に主婦やお婆さん等が集る一つの因み講である。講中が米一合を持参して、詠歌をあげてあとで、盆飯をいただきながら話し合いが行われるものである。

天理教

天理教本部は、奈良県天理市で、天保九年一〇月二六日、教祖中山キミ女により伝導されたもので、笠戸にも教会堂もあり本部への往来も盛んである。

盆踊

盆踊りとして、六日に杵崎踊、一六日霊（みたま）様、一七日観音踊、二〇日御大師踊、二三日うら盆踊りが盛大に行われたが、今は一五日の一日限りの盆踊りが、部落をあげて行われておる。

その他

創価学会・耕白稲成・百万辺・えびす祭・土産神講等がある。

(八) 産業

◇鉱業

現在本浦の産業については特筆すべきものは無いが昭和の初期から中期頃までは、石灰、マンガン鉱、水晶、砥石等が採掘されていた。

特に石灰は日本で最初に発見製造されたのが笠戸島であると聞いたら誰も驚嘆するであろう。全国いずれの地方にも製造使用されていなかつた　旧藩時代に、わが笠戸本浦の橋本某氏によつて発見された。

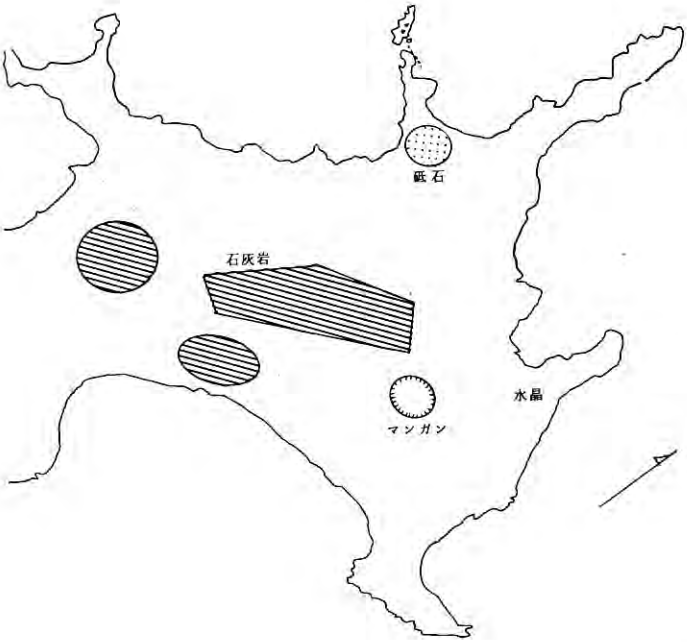
当初は製法も幼稚であつたが、熱心に研究改良を重ねついに良質の石灰を造る事に成功したのである。その事が世間一般に知れ渡り、ついに今日のごとく広く利用されるに至り本浦の誇として特筆大書するに足りる。

しかし現在は数個所あつた石灰製造所も廃所されてその跡を見る事も出来ない。

マンガン鉱は小学校の裏山の俗称マンガン山の中腹に大正時代にさかんに採掘された坑道があるがこれも現在は廃坑となつている。

砥石は良質の鉱脈があり。多い年には「六千貫」余り採掘されたと九〇周年誌には記されている。

現在その山には勤労者福祉センター「笠戸島ハイツ」が建設され市民の憩いの場として賑わつている。



鉱石分布図

◇農　業

本浦の田畑の耕地面積は水田六・〇三ヘクタール、畑一三ヘクタールであるが、ほとんどが兼業農家で大半は休耕している。

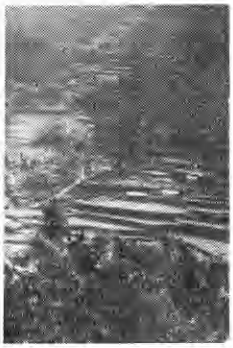
特に奥畑、立畑、戎殿などは何年間も耕作されておらず荒れるに任されている。

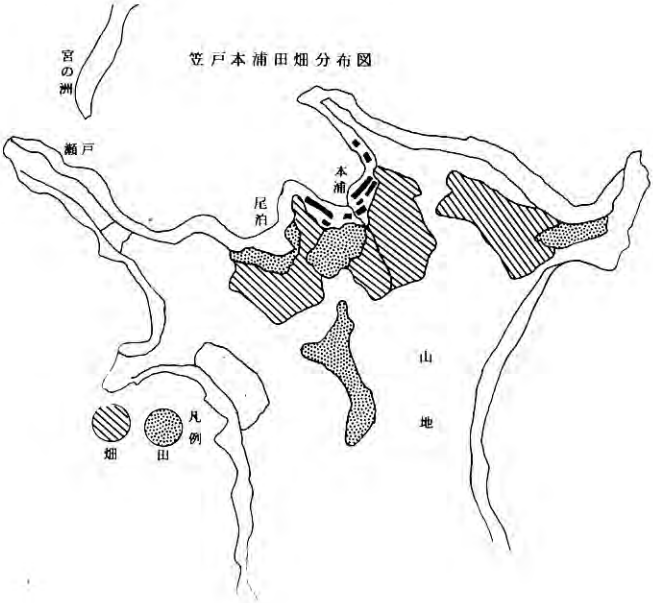
その他植林、みかん、桃等果実の栽培や季節の野菜が少々作られている程度でありその作業もほとんど年寄りの仕事になつているようである。

昭和初期頃までの笠戸島には良質の松茸の産地として有名であり、下関の方面まで出荷されていた。

笠戸島の山林はほとんどが国有林であつたために営林署の許可を受けて（当時は鑑札といつた。）山に入つたそうである。

現在では山が荒れ、松茸の姿を見る事が出来なくなったことは残念である。





◇水産業

本浦の漁業は、小型定置網を主体に小型機船底曳網、たこ壺、いか巣網、建網、一本釣などであるが、小型定置網は俗に壺網といい、従来のものよりかなり改良されて作業も従来よりはずい分楽になつたようである。尚漁船、漁業専業者、及び魚獲実績比較を次表に示す。

地区別漁船数

単位＝隻

地区名＼年度	昭和42年	昭和51年
瀬戸	6	6
本浦	25	28
東風浦	7	2
合計	38	36

地区別組合員数

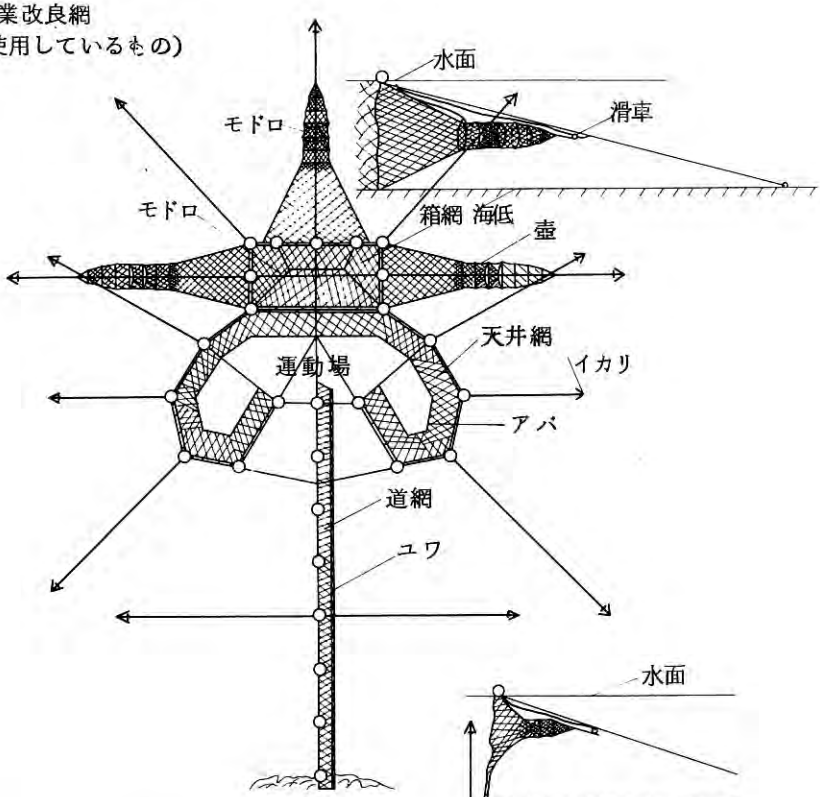
単位＝人

地区名＼年度 正準別	昭和42年		昭和51年	
	正組合員	準組合員	正組合員	準組合員
瀬戸	6	0	4	2
本浦	16	16	17	14
東風浦	7	1	1	0
合計	46		38	

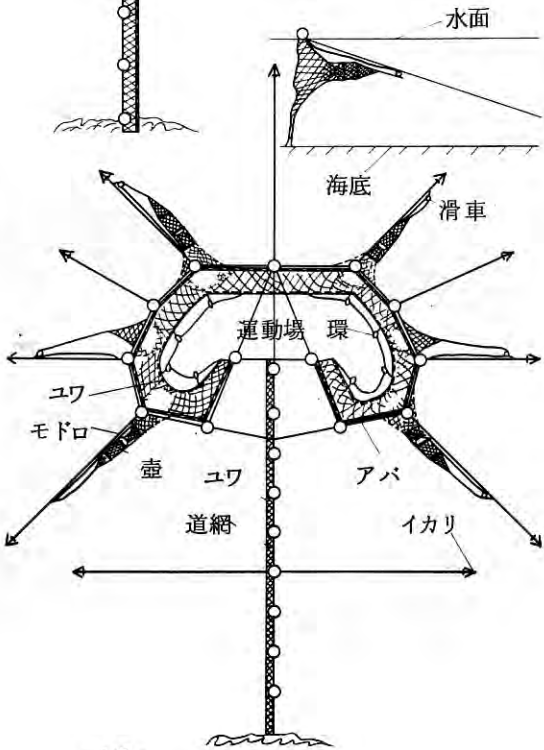
本浦地区魚獲実績比較表

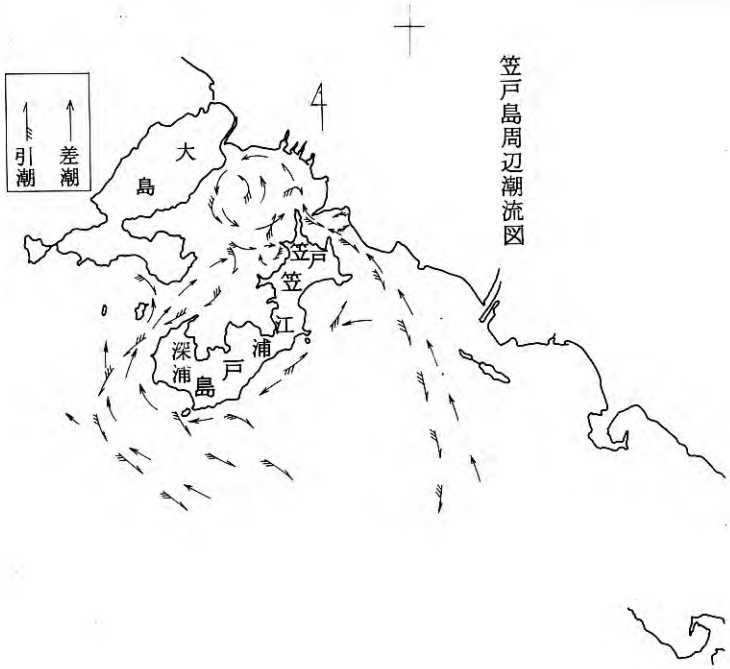
昭和42年			昭和51年		
魚名	数量 kg	単価 円	魚名	数量 kg	単価 円
ハゲ	22,000	120	ハゲ	17,600	380
イカ	14,000	100	イカ	7,300	430
ボラ	9,800	130	ボラ	7,000	500
アジ	9,500	100	アジ	5,400	1,200
コノシロ	5,500	80	コノシロ	3,500	400
スズキ	4,600	250	スズキ	2,900	2,500
チヌ	4,500	300	チヌ	2,100	1,600
エビ	5,300	130	エビ	2,300	850
タコ	3,500	150	タコ	3,400	1,100
ナマコ	5,200	50	ナマコ	2,500	180
海藻	1,200	25	海藻	200	350

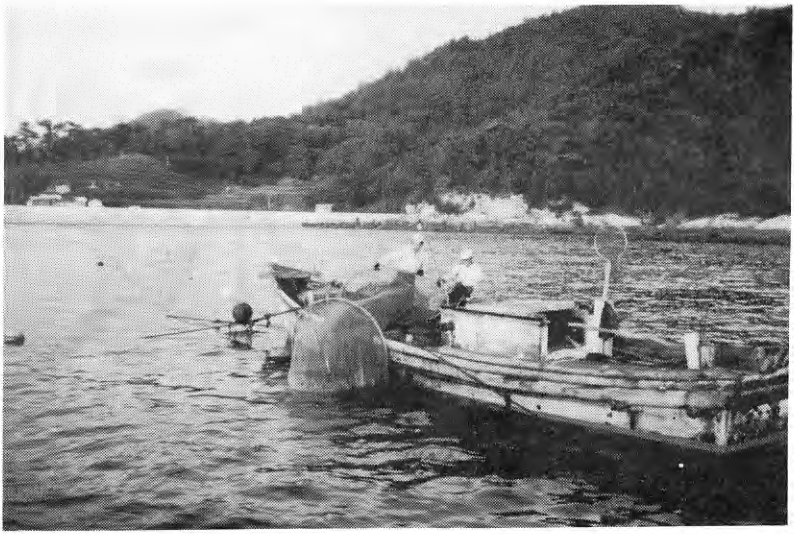
小型定置網漁業改良網
(現在使用しているもの)



旧式定置網




笠戸島周辺潮流図
差潮
引潮
大島
笠戸
笠江
浦
深浦
戸島



次に種目別の操業期間は次の通りである。

一　小型定置網

操業期間（三月二〇日～一〇月三一日）

二　小型機船底曳網

1. 春の休業（四月二〇日午前七時～五月二〇日午前七時まで）

2. 秋の休業（九月二〇日午前七時～一〇月三日午前七時まで）

3. 手繰第二種（エビ漕網）漁業

操業期間（周年　ただし休業期間は前記の通りである。）

三　たこつぼ漁業

操業期間（周年）

四　いか巣網

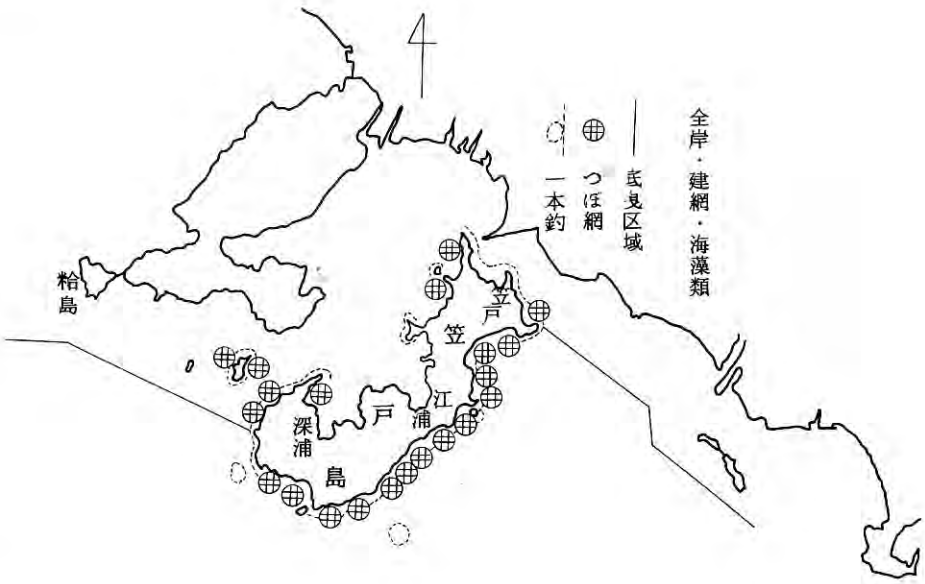
操業期間（三月一日～六月三〇日まで）

五　建　網

操業期間（二月一日～一二月三一日まで）

六　一本釣

操業期間（周年）



◇笠戸船渠笠戸造船所

島内人口四〇〇〇人のこの島をささえる産業基盤として、江ノ浦に笠戸船渠笠戸造船所がある。

この工場は大正七年一二月に笠戸島船渠株式会社として設立され、昭和五年九月その資産を継承、大型船修理工場として笠戸船渠株式会社が設立され、当初は修理専門の工場として活躍していたが、昭和三一年一月造船所設備を一新して新造船部門に本格的に乗り出し、昭和三四年一二月に宇部興産株式会社及ジャパンライン株式会社が経営に参加され一段と活気を取りもどして来た。

また造船界での大型化が進むにつれて当工場も昭和四三年九月には七万トン修繕ドック（三号ドック）及機械工場を完成、昭和四七年一一月には九万トン建造ドック及大型船建造付帯設備を完成、翌四八年二月に新しく修繕工場が完成された。

尚当工場の資本金は二二億六千万円、従業員一八五〇名である。

(九) 交　通

昭和四五年一一月一四日に、島民の長年の夢であつた本土宮ノ洲と笠戸島瀬戸を結ぶ笠戸大橋（この橋はランガートラス式の真紅の橋で、橋長が四七六メートル、海峡部の長さが一五六メートル、幅員が八メートル、車道六・五メートル、歩道一・五メートル）が完成しました。これによつて笠戸島は陸続きとなつて、陸上交通の便がよくなりました。水道も全島にゆきわたりました。笠戸島国有林の自然休養林の指定による白浜キャンプ場や白浜海水浴場の整備と国民宿舎「大城」や老人福祉センター「小城」のオープン、さらに勤労者総合福祉センター、笠戸島ハイツのオープンされたことにより、笠戸島は、本市をはじめ周南地区住民の憩いの場として、にわかに脚光をあびることになりました。

笠戸大橋の完成で、江の浦までバスが開通（昭和四五年一二月一日）、昭和四五年一一月三〇日に新川・本浦間の巡航船廃止、バス路線の深浦まで延長により、昭和五二年三月三一日で新川・江の浦、江の浦・深浦間の巡航船が廃止された。

これにより、大正八年以来、笠戸島と本土とを結ぶ不可決の交通機関であつた笠戸巡航船の役目は完全に終わり、当時活躍した巡航船は、今は笠戸港内に船体を休めている。

また、大正三年以来、瀬戸部落の住民によつて、輪番によつて行われた渡し舟も、終わりをつげたわけである。

(十) 通　信

笠戸島には江の浦に、笠戸島郵便局（無集配特定郵便局）があるが、本浦地区の人は殆んど利用していない。下松郵便局の集配地域となつており、多少の不便はあるが運用面では支障がないものと思う。

電話は農村電話が、昭和四七年一〇月に自動化されて、一般の電話と同様な取扱を受けており、電報も電話により能率良く利用出来る利便を得ている。

現在笠戸島（五二局）には全体で八八四台架設されており、当地区でも全戸に近く加入台数も一〇〇台位である。

笠戸郷土年表

天和	三年（一六八三）	笠戸八幡宮灯ろう建立
宝歴	八年（一七五八）	〃　大鳥居　〃
寛政	五年（一七九三）	〃　灯ろう　〃
文政	二年（一八一九）	〃　手洗かめ〃
安政	三年（一八五六）	〃　灯ろう　〃
明治	一〇年（一八七八）	笠戸小学校設置
〃	一九年（一八八六）	笠戸尋常小学校と呼ぶ
〃	二七年（一八九四）	笠戸八幡宮焼失
〃	三四年（一九〇一）	笠戸八幡宮再建
大正	三年（一九一四）	笠戸信用購買販売組合設立
〃	一二年（一九二三）	笠戸巡航船就航（新川ー江の浦）
〃	一三年（一九二四）	〃（新川ー笠戸間）
〃	〃（〃）	送電線完成、電灯使用開始
昭和	九年（一九三四）	海底ケーブル敷設、笠戸島（江の浦）電話開通
昭和	一四年（一九三九）	下松町と合併（下松市制施行）
〃	二一年（一九四六）	農業会と改称以後笠戸農業協同組合となる。
〃	二六年（一九五一）	下松市役所笠戸駐在所設置
〃	二七年（一九五二）	笠戸小学校及駐在所に電話架設
〃	二八年（一九五三）	瀬戸内海国立公園笠戸島の指定を受く
〃	三〇年（一九五五）	本浦ー瀬戸間道路整備
〃	三二年（一九五七）	笠戸簡易水道完成
〃	三五年（一九六〇）	公衆電話架設（本浦）
〃	三六年（一九六一）	〃（瀬戸）
〃	〃（〃）	笠戸自治会館落成
〃	〃（〃）	本浦道路舗装完成
〃	三七年（一九六二）	笠戸僻地保育所開所
〃	三八年（一九六三）	本浦護岸第一次完成
〃	四〇年（一九六五）	東風浦道路延長完成
〃	四一年（一九六六）	全市農協合併、下松市

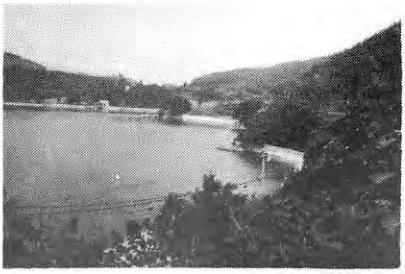
昭和四二年（一九六七）　農協笠戸支所となる
〃　（〃）　農村電話開通
〃　四三年（一九六八）　テレビ共聴施設完成
〃　（〃）　笠戸大橋起工さる
〃　四五年（一九七〇）　笠戸児童館落成
〃　（〃）　笠戸大橋開通
〃　四六年（一九七一）　バス開通、新川ー笠戸
〃　四七年（一九七二）　巡航船廃止
〃　五〇年（一九七五）　国民宿舎大城完成
〃　五一年（一九七六）　電話自動化開通
〃　（〃）　勤労者福祉センター笠戸島ハイツ完成
〃　五二年（一九七七）　尾泊海浜公園及運動場完成
〃　（〃）　橋本前知事死去
〃　（〃）　巡航船全面廃止
〃　（〃）　笠戸本浦駐在所廃止
〃　（〃）　国立公園周遊地指定

笠戸小全景

考える像

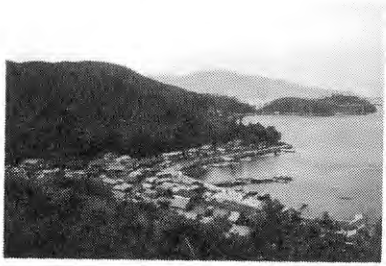
二宮金次郎

９０周年



落

尾　　郷



笠　戸　本　浦

東　風　浦

瀬　　戸

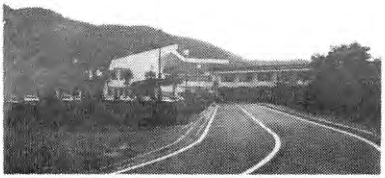
波　切　不　動

鎌　石　岬

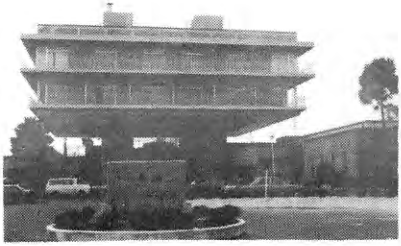
本浦海浜公園

白　浜

峠　ノ　浦



笠戸島ハイツ



大　　城

光　明　寺

老人集会所

児　童　館

笠戸から
日本石油精製㈱
下松製油所
㈱日立製作所
笠戸工場
東洋鋼鈑㈱
下松工場
を望む

第二編

教育誌

一　笠戸小学校沿革

(一) 寺子屋、私塾から笠戸小学校へ

明治三年
　家塾　教導館　村上敏雄（神官）
明治四年
　家塾（西市）　慈教堂　中村一現（僧侶）
　　西小学と称す
　家塾（大海町）三木三喜太（旧徳山藩士）
　　大海小学と称す
明治五年
　家塾　森重亀之助（旧萩藩士）―平田学校
　　（田村治郎左ェ門）
　寺子屋　高橋某
　〃　右谷某
　〃　清木某
明治八年八月一五日　平田小学校と称す
　　校長　塩之屋某
明治一〇年三月三日平田小学笠戸分教場をおく
明治一四年三月　公集小学と称す

(二) 笠戸小学校開校後の沿革

年月日	校地・校舎・施設・設備・校長 教員数・児童数
明一〇　三	・平田小学校笠戸分教場となる （光明寺）（三月三日）
一四　四	・山口県小学笠戸分教場（二年三年）簡易科に当るもの
二〇　四	・小学令により笠戸簡易小学校として独立する。(三年制) 笠戸神社の下に校舎新築する。
二五　九	・改正小学令実施により笠戸尋常小学校と改称
三四　四	・初代校長　古本多助 ・二代校長　福谷寅吉 ・三代校長　古本多助
四〇　四	・四代校長　村井又四郎
四一　四	・義務教育延長により第五学年を置く　二学級　八六名
四二　四	・笠戸尋常小学校となり、第六学年を置く　三学級　一二四名
四三一〇	・平家三教室現在地に新築する 五代校長　吉本遠次郎

大四　四　・六代校長　田村正作　教員数三名　三学級　一一一名

五　四　・三学級　一二〇名

六　四　・三学級　一一四名

七　四　・三学級　一二一名

八　四　・七代校長　藤井真作　教員数五名　三学級　一二五名

九　四　・八代校長　藤井民部　教員数三名　三学級　一四一名

一〇　・三学級　一三八名

一一　・九代校長　田村政次　三学級　一三六名

一二　・三学級　一四九名

一三　・三学級　一四二名

一四　・一〇代校長　下村軍次　三学級　一二七名

一五　・三学級　一三四名

昭二　四　・教員数四名（裁縫専科をおく）　三学級　一二八名

三　四　・三学級　一三二名

昭三・一一　・二教室を増築する　運動場を拡張する　三学級　一三二名

四　四　・教員数五名　三学級　一三〇名

五　四　・教員数四名　三学級　一三一名

六　四　・三学級　一二六名

七　四　・三学級　一二五名

八　四　・三学級　一一四名

九　四　・三学級　一一六名

一〇　四　・三学級　一一五名

一一　四　・三学級　一〇二名

一二　四　・三学級　一〇五名

一三　四　・一一代校長　中倉　勉　教員数五名（内専科一名）三学級　一〇二名

一四　四　・三学級　一〇五名

一五　四　・教員数四名　三学級　九六名

一六　四　・笠戸国民学校と改称する　三学級　一〇六名

一七　四　・一二代校長　為久恒介　三学級　一一三名

昭一八　四　・三学級　一〇五名
一九　四　・高等科第一・二学年をおく
教員数六名　四学級　一六四名
二〇　四　・教員数五名　四学級　一五三名
二一　四　・教育後援会並母の会結成
一三代校長　岩本熊蔵　教員数
六名　四学級　一五五名
二二　四　・六三制により笠戸小学校と改称
する　四学級　一二八名
二三　四　・教員数五名　児童数　一一七名
二四　四　・一四代校長　藤井　勝　教員数
四名　児童数　一一九名
二五　四　・一五代校長　井上　勲　教員数
七名　六学級　一二一名　教育後
援会を笠戸小学校ＰＴＡと称す
二六　四　・二階建三教室増築並に講堂及図
書室増改築　六学級　一四一名
二七　四　・六学級　一二二名
二八　七　・講堂改造落成　六学級　一四三
名

昭二九　四　・一六代校長　角　為一　六学級
一二五名
三〇　四　・運動場を拡長する　五学級　一
三五名　教員数　六名
三一　四　・五学級　一三五名
三二　四　・校歌制定発表会（一二月）五学
級　一三九名
三三　四　・一七代校長　倉田照雄　六学級
一四一名　教員数　七名　便所
改築（六月）創立八〇周年記念
式典（一一月）
三四　四　・六学級　一三一名　教員数　六
名
三五　四　・新校舎二階建増築並に給食室新
築（一〇月）五学級　一一八名
三六　四　・五学級　一〇四名
三七　四　・一八代校長　木原　博　四学級
九八名　教員数　五名　温室新
設
三八　四　・四学級　八三名

昭三九　四
四〇　四
四一　四
・四学級　七六名
・四学級　六八名
・一九代校長　勢一輝雄　三学級
六三名　教員数　四名　低学年
用砂遊び場新設
四二　四
・創立九〇周年記念式典（一一月）
三学級　五七名　教員数　五
名
四三　四
・講堂を笠戸公民館として併設変
更　三学級　六〇名
四四　四
・二〇代校長　好山猪住　三学級
五五名　鉄製太鼓橋新設
四五　四
・講堂の改装　廻転ジャングルジ
ム新設　録音機三菱フォンテ購
入　三学級　五三名
四六　四
・事務機購入（計算機　コピー）
三菱フォンテ購入　三学級　五
一名
四七　四
・二一代校長　藤沢　博　三学級
五五名　教員数六名　視聴覚機
器購入（ＯＨＰ　スクリーン）
ストーブ設置
・時報時計設置　ドライコピーマ
シン購入　給食室前コンクリー
ト張　灯油粘土窯購入　三学級
五九名
昭四八　四
・視聴覚機器（８ｍｍ撮影機　映
写機）ガス炊飯器購入　四学級
六二名　教員数七名
四九　四
・図書室間仕切り、職員室用スチ
ール机設置　理科室水道施設
給食室釜設置
五〇　四
・二二代校長　佐々木雄造　五学
級　六二名　教員数　八名
笠戸小交通安全推進児童隊結成
市指定学習指導研究発表大会開
催　国旗掲揚塔二基建立
五一　四
・平行雲梯　暗幕設置　炊事施設
新設　創立百周年記念式挙行
（一一・一三）　四学級五九名
教員数七名
五二　四

(三) 下松市教育百年の歩み

年号	一般的事項	下松市に関する事項
明治四	・廃藩置県・文部省設置	
〃五	・学制を発布「小学校教則」を公布、下等小学上等小学とも四年制・八級制	・花岡小の前身「集成舎」廃寺地蔵院を校舎にあて創立（後第一番小学） ・旧久保村内大字ごとに小学校設置
〃六	・小学校休日を改め一、六の日を休日とする。	・現米川小学校の前進煤間小学校下谷分校として創立 ・第一番小学校前身花岡小学校西河原分塾創立 ・下松小学校創立（周慶寺校舎）
〃七	・愛知・広島・長崎新潟に官立師範学校を設立　東京に女子師範学校を設立 ・小学校教員免許規則制定	
〃八	・学令を満六才から一四才までと定める ・東京師範学校に中学師範科を設置	・旧末武南村内の私塾三校それぞれ小学校と改称
〃九	・日曜日を休日とする。	・深浦小学校の前身深浦巡回授業所が開設された。
〃一〇		・笠戸小学校前身が創立された（三、三）
〃一一	・「日本教育令」原案を上奏 ・小学教則が改正され簡易科二年尋常科四年となる。	・米川小学校大小区の改正に伴い譲羽小学校中野分校となる。

明治一二・「学制」を廃し、「教育令」公布

〃一三・「教育令」を改正

〃一四・「小学校教則綱領」を制定（初等科三年、中等科三科、高等科二年）

・「小学校教員心得」を制定

・旧末武南村平田小学校及び私塾を統合公集小学校として創立

・西河原分塾、末武中村小学校として独立

〃一五・県から小学校建築心得出る。

・豊井小学校創立

〃一六・小学校教科書の認可制度を実施

・学務委員事務要項の定めにより都濃郡学務担当者がきまった

・中村小学校を花岡小学校の分校とす。

・旧久保村小学を統合東陽小学校創立

〃一八・第一次伊藤内閣成立

・譲羽小学校中野分校瀬戸尋常小学校として独立

明治一九・「小学校令」を制定尋常・高等にわけ尋常小学校義務制

・「教科用図書検定条例」を制定

〃二〇・「教科用図書検定規則」制定

・公集尋常小学校に高等科設置

・笠戸簡易小学校として独立

・花岡小学校高陽分校を廃し本校に合併高等科設置、別に簡易科もおく。

・中村に簡易小学校設置

〃二一・市制・町村制を公布

・公集尋常小学校に簡易科を置く。

・国歌「君ケ代」の制定を各条約国に通告
・豊井簡易小学校と改称

明治二二・大日本帝国憲法を発布
・深浦簡易小学校として独立
・公集尋常小学校簡易科を廃す。

〃二三・「小学校令」を制定
・「教育ニ関スル勅語」を発布

〃二四・小学祝日大祭日儀式規程を制定
・小学校教則大綱を制定

〃二五
・中村分校独立し中村小学校と改称
・改正小学校令により深浦尋常小学校、笠戸尋常小学校、公集尋常高等小学校と改称
・豊井簡易小学校下松尋常小学校の分校となる。

明治二六・実業補習学校規定を制定
・東陽尋常小学校へ高等科設置

〃二七・日清戦争起こる
・豊井小学校独立
・県下に実業補習学校創立
・下松尋常小学校高等科設置

〃三〇・地方視学を置く
・京都帝国大学を設置
・「師範教育令」を公布
・尋常師範学校を師範学校と改称

〃三一・「学校医設置規定」公布

〃三二・教育と宗教の分離を訓令

監督官巡視簿

・「私立学校令」を公布
・「市町村立小学校教育費国庫補助法」を公布
・視学官・視学、郡視学を設置
・「図書館令」制定

明治三三・小学校令を改定（尋常小学校を四年に統一、義務教育を四年制とした。）
・「教育免許令」を公布

〃三四・師範学校、小学校以外の学校にも、道府県立、郡立、市町村立、私立等の文字をつける。

〃三六・国定教科書制度成立
・米川小学校に高等科設置
・米川小大藤谷分教場設置
・花岡尋常高等小学校に女子補習科を併設（修業年業二年）
・下松尋常高等小学校に女子補習科を併設

明治三七・日露戦争はじまる
・全国小学校で国定教科書使用開始

〃三八・「小学校令」を改正（義務教育年限六年に延長）

〃四〇・「戊申詔書」を発布

〃四一・笠戸尋常小学校に五学年を置く。
・下松女子補習学校創設
・花岡女子補習学校開始（補習科廃止）
・花岡実業補習学校創立（二年制男子）

明45卒業写真

明治四二・種痘法公布（小学校児童は必ず在学中第二期を完了）・笠戸尋常小学校に六学年を置く。・公集農業補習学校を小学校に併設

〃四五・大正と改元・末武北村文庫を花岡小内に建設

大正　二・久保村立東陽文庫を東陽小内に建設・東陽女子実業学校を併設

大3卒業写真

〃　三・第一次世界大戦はじまる。

〃　六・山口県訓令で青年団指導方針が示される。・下松実業補習学校創立・男子、女子青年団発足・久保村立東陽実業実践学校と改称

〃　七・「市町村義務教育費国庫負担法」を公布・東陽実業実践学校に男子部を加え久保村立東陽実業補習学校と改称

大正　八・「小学校令、中学校令改正」・訓令その他で学校衛生に関するものが発せられた。

〃　九・文部省「実業補習学校規則」を制定・山口県立下松工業学校設立認可

〃　一〇・県立下松工業学校開校（年限四年）

〃　一一・学制はん布五〇周年式挙行

〃　一二・国民精神作興に関する詔書を発布

〃　一三・末武南村立公集図書館創設

〃　一四・花岡実業補習学校を

花岡実業実践女学校と改称

大正一五・「幼稚園令」を公布

・「青年訓練所令」を公布

・各小学校に少年赤十字団結成

・各市町村に青年訓練所が設けられる。

昭和二・昭和と改元

・私立下松幼稚園設立

・私立下松慈光幼稚園設立

〃三・教科書にメートル法採用

・下松実業実践学校と改称（補習学校）

〃四・私立下松高等女学校設立開校

〃五・「家庭教育振興ニ関スル件」を訓令

・日石保育所ができる。

〃六・公集実業実践学校と改称（補習学校）

・深浦実業実践学校創立

・深浦尋常小学校江の浦分教場設置

昭和八・下松高女に家政女学校併設

〃九・下松工業修業年限五年となる。

〃一〇・「青年学校令」を公布

・全国向け学校放送開始

・各地区補習学校、実業実践学校を青年学校と改称

・東陽尋常高等小学校を久保尋常高等小学校と改称

〃一二・末武青年学校女子部を設置

・下松工業第二部設置（修了一年）

〃一三・下松工業第二本科併設（修了二年）

〃一四・「青年学校令」改正（満一九才未満義

・下松市制をしく（下松町、末武南村、久

務制となる。）　保村、花岡村合併）
・「青少年学徒ニ賜ハリタル勅語」を下賜
昭和一六・「国民学校令」を公布
・各小学校を国民学校と改称
・太平洋戦争はじまる
・花岡四恩幼稚園設立
〃一七・学制発布七〇周年
・下松市体育会発足
〃一八・学徒戦時動員体制発表
・下松青年学校独立の青年学校となる。
〃一九・「大日本育英会法」を公布
・女子挺身動員
・下松工業四年制となる。
・「学徒勤労令」を公布
・県立下松女子商業学校創立開校
・笠戸国民学校高等科設置
〃二〇・「決戦教育措置要綱」にもとづき初等科を除き一年間授業停止となる。
・豊井小空爆を受ける
・運動場開懇食料増産をはかる。
・学童（高等科）諸工場へ動員される。
・「学童集団疎開強化要綱」を決定
・「戦時教育令」を公布
・「終戦ニ関スル件」を訓令
・占領軍指令により戦時教育の切りかえ
・新教育指針編集配布
昭和二一・アメリカ教育使節団来日
・体育会を下松市体育協会と改称
・日本国憲法公布
・女子商を下松高等女学校と改称
・江口保育所、末光保育所開設
〃二二・「教育基本法」を
・学校給食開始

公布
・六三制の実施
・「学校教育法」および「施行規則」を公布
・国民学校を小学校と改称
・新制中学校一斉開校
・各校にPTAがつくられる。

昭和二三・「教育委員会法」公布、教育委員選挙
・市内青年学校廃止
・下松工業、下松工業高等学校と改称
・旧制高校、青年学校廃止、旧制中学・下松高女、下松高等学校高等学校に昇格
・下松第二工業高校は学校と改称

〃二四・教職員免許法が示される。
・下松第二工業高校は統合され定時制となる。
・検定教科書使用開始
・第二慈光幼稚園設立
・ガールスカウト結団

〃二五・第二次教育使節団来日
・愛隣、和光保育園設立
・下松市連合婦人会発足
・第一回市民美術展、市民体育祭開催

昭和二六・対日講和条約調印
・ボーイスカウト結団
・文化協会発足
・江の浦小学校独立
・下松市立図書館開設
・下松市連合青年団発足
・下松市教育委員会発足
・第一回市民音楽祭開催

〃二八・中央教育審議会発足
・八口、青木幼稚園、平田保育園設立

〃二九
・玉鶴、妹背、久保、末光、江口、正立幼稚園、下松中央保育園設立
・米川村下松市へ合併
・下松市制一五周年記念行事実施

昭和三〇

昭３０の校舎

・第三、第四中学校統合末武中学校創立、各中学校名変更
・第一回教育研究大会開催
・市長任命制による教育委員会発足

〃三一・「教育委員会法」改正

〃三三・小中学校に道徳の時間を特設

〃三四

・下松市制二〇周年記念行事実施

〃三六・スポーツ振興法」公布

・市民体育館及び公園プール開設

〃三七

・笠戸幼稚園のはじめ双葉会創設
・地区公民館開設完了
・下松市教育委員会発足一〇周年記念行事

昭和三八・義務教育教科書の無償制度を実施

・第一八回国民体育大会開催

〃三九・第一八回東京オリンピック開催

・市制二五周年記念式挙行
・市民館開設、図書館移築開設
・市民運動場開設

〃四〇

〃四一・一〇月一〇日を体育の日として国民の祝日に加えた。

〃四二・二月一一日を建国記念の日として国民の祝日に加えた。

〃四三・小学校学習指導要領全面改訂（四六年より実施）

〃四四

・下松市民憲章制定

〃四五・国産人工衛星打上げに成功

・笠戸大橋完成

昭和四六・小学校教育課程全面改正
〃四七・第一一回札幌オリンピック大会開催
・市教育委員会発足二〇周年記念式典
・本浦ー新川間巡航船廃止
・本浦ー下松間バス開通
〃四八・学校無人化実施
〃四九
・山陽新幹線開通
〃五〇
・周南バイパス開通
・笠戸臨海公園完成
〃五二・小学校教育課程改正（五五年度より実施）
・巡航船全面廃止
・深浦までバス開通
・市幼児プール完成

二　笠戸小学校の現況

(一)　本校の教育目標

心身ともに健やかで、社会性に富み、調和のとれた人間性豊かな個人の完成を期するとともに、進んで国家・社会の発展に貢献寄与できる、民主的でたくましい日本人を育成する。

- 自分で考え、実行する子
- 仲よく、助けあう子
- 健康で、がんばる子

(二)　学校経営の方針ならびに具体的施策

◇　下松教育の指標に添い、豊かな人間性と個性の開発・伸長に努める。

・　学校教育方針の徹底と共通理解に立ち、実践化を期する。

・　教師、児童それぞれの相互理解と信頼の上に立つて、人間性あふれる教育実践に努める。

・　教職使命観を確立し、小規模校としての特色を生かし障害を克服する。

◇　学校、学級経営の民主化、合理化に努め、教育効果を高める。

・　校務分掌、指導体制の組織化を図り、能率的かつ効果的に運営する。

・　望ましい人間関係のもとで、総力を結集して教育目標の具現化に努める。

◇　教職員の専門性の伸長と協力体制のもとに、校内諸施設、設備の十分な活用により指導効果

をあげる。

・ 自己ならびに相互に研修し、教育専門性を確立する。

・ 協力体制により、小規模校としての特色を生かした指導を行い問題を解明していく。

・ 校内施設、設備を整備し、教育機器の活用を図り、指導効果を高める。

◇ 児童の長所、短所を的確に把握し、課題をもつて意欲的に学習していく姿勢を形成する。

・ 学習における個別化、集団化を図り学習効果をあげる。

・ 学習意欲を高め、つねに課題をもち、それを解決していく探求的態度を育成する。

・ 本校教育目標の具現化に努め、実践において徹底を期する。

◇ よい伝統の継承発展に努めるとともに、地域社会と一体となつて教育効果をあげる。

・ 家庭や地域との連携を密にし、相互の信頼と敬愛のもとに教育を進める。

・ よい校風の樹立に努め、よい環境のもとで地域ぐるみで教育にあたる。

・ 小規模校、辺地にありがちな閉鎖性や地位の固定化などを打破し、社会性に富んだ人間の育成を期する。

(三) 本年度の努力点

山口県および下松市で示された教育重点施策ならびに努力点をふまえ本校の実態に立つて、次のような努力点を設定し、教育効果の高揚・充実を図つていく。

◇ 教科・道徳指導

(1) 教育課程の適正な管理運営により、心身の調和的発達を図る。

(2) 各教科の学習指導法を改善し、基礎学力の充実を図る。

(3) 少人数学級の長所を生かし、個別指導の徹底を期する。

(4) 自学的態度を育て、学びとりの姿勢の形成に努める。

(5) 学校図書館の利用や、教育機器の活用を図るとともに、協力的な指導体制のもと、小規模校としての障害を克服し学習課程の最適化に努め、指導効果を高める。

(6) 各教科・特活との密接な関連のもとに、道徳教育の効果を高め、知情意一体としての実践力を身につけさせる。

◇ 特別活動

(1) 学級活動、委員会活動などを通じ、自主的自律的な生活態度を育成するとともに、社会連帯感や責任感などを養う。

(2) 閉鎖的になりやすい欠点を補正し、社会性の育成に努める。

(3) 心身ともに健全な発達を促し、実践力をつけ、勤労を尊ぶ態度を身につけさせる。

(4) 健全な趣味をもち、余暇を善用してスポーツ等に親しむ態度を身につけさせる。

◇ 生徒指導

(1) 個々の能力適性を科学的、継続的に分析把握し、正しい児童理解に立つ生徒指導を進める。

(2) 本校教育のめざす全人的児童の育成のため個別指導の徹底を図る。

(3) 児童の長所、短所を的確につかみ、家庭・地域一体となつて指導にあたる。

(4) 生徒指導計画により調和的な発達を図るが基本的な事項については、徹底できるまで指導をくりかえす。

◇ 健康安全指導

(1) 健康で安全な生活をするため、基本的な生活態度やよい習慣を形成する。

(2) 交通安全に留意し、道路交通に関する知識を理解させ、交通安全についての習慣や態度を育成する。

◇ 給食指導

(1) 地域の実情に即応して栄養を考慮した学校給食により、食生活の向上を図る。

(2) 給食方法にもできるだけ改善を加え、喜んで食べるようにし、食事の作法やマナー等の徹底を図る。

◇ 同和教育

(1) 同和教育の意義を認識し、差別に対する不合理と民主化の必要性を機会あるごとに指導し、同和教育の徹底をはかる。

(2) 同和教育は、教育課程全般を通じて行うが特に道徳、社会科においては、その指導を重点化して行う。

(3) 副読本「なかよし」の効果的利用を図るとともに、参観日などを通じて保護者への啓もうにも努め、学校、家庭一体となつて同和教育の推進にあたる。

◇ その他

(1) 清掃美化作業の徹底を図り、校舎内外の整備、美化に努める。

(2) 市民憲章運動を推進し、市民としての意識化を図るが、特に「花」と「緑」を多くする運動には、地域一体となつて活動を進める。

(四) 校内研修

研修課題

少人数学級における学習指導の効率化

―自学自習のできる子どもの育成―

◇ 研修内容・方法

(1) 少人数学級における個別化とともに集団化をどのように位置づけ組織化すれば学習指導の効果をあげ、ひとりひとりを生かすことができるか。

(2) 目標の明確化を図り、自学自習を進める手だての学習の手引きをどのように改善すればよいか。

(3) 自学自習を自主性、主体性に結びつけていくため、子ども達の活動の場をどのように設定するか。

・ 実践即研修の立場をふまえて、日々課題の解明に努める。

・ 記録の累積と資料の保存に努め漸新的な研修を行う。

・ 授業を通して課題解明のよりよい方策を見出していく。

・ 特別活動を重視し、児童を前面に押し出し、活動できる場を多く設ける。

(五) 教育課程の編成・運用の基本事項

。 年間授業日数は二四五日とする。

。 各教科および道徳の年間授業日数は二一〇日とする。

。 各教科および道徳の授業時数並びに各学年におけるこれらの総時数は、「学校教育法施行規則第二四条の二別表第一に定める標準時数を確保する。

。 授業の一単位時間は四五分とする。

。 作文指導は国語総時数の二～三割をあてる。

。 毛筆による書写指導は、三年生以上で行い、それぞれ年間二〇時間あてる。

。 五・六年における保健指導は、体育時数の一割をあてる。

。 図工科の領域別時数の割合を

絵画および彫塑	四〇%
デザイン	一五%
工作	四〇%
鑑賞	五%

とする。

。 年間授業時数

教科・道徳	一二八五時間
特別活動	一〇八五時間
行事	二〇〇時間
学級指導	八三時間
クラブ活動	三〇時間
児童会活動	三五時間
学級会	一七時間
	三五時間

○ 児童の負担が過重にならないよう配慮する。
○ 教師の特性を生かし協力的指導の組織を加味する。
○ 指導要領の研究、消化、実践をはかる。
○ 特別活動、ことに学校行事の内容を精選する。
○ 一般行事その他、欠課時数を生じやすいものの運営をくふうし、時数の確保につとめる。
○ 体力の増強について積極的に配慮する。
○ 次の年間指導計画は、別に様式を定めて作成する。

(1) 各教科　(2) 道徳　(3) 児童会活動
(4) 学級会　(5) 学校行事　(6) 学級指導
(7) 同和教育　(8) 純潔教育　(9) 交通安全指導
(10) 保健指導　(11) 学校給食

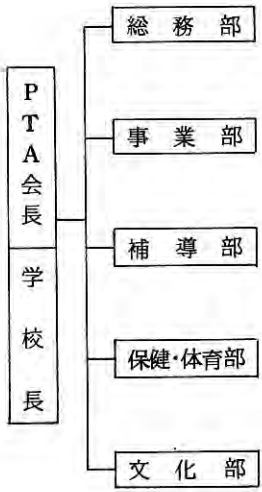
(六) PTA活動

戦後間もない昭和二一年三月、第一次アメリカ使節団が来日して日本の教育制度全般について報告書を連合軍総司令官に提出した。この報告書には「児童・生徒の福祉増進及び教育計画の改善のために、父母と教師の会に激励を与えること」というのがある。この報告書の主旨をくんで総司令部民間教育情報部は文部省に対してPTAの研究と結成をうながした。

昭和二三年五月、文部省は「父母と先生の会教育民主化への手引」という資料を全国の知事あてに配布してPTAづくりを奨励した。これが日本におけるPTAの第一歩であるといえる。PTAの結成は新教育制度の制定や文部省の指導と普及活動によつて急速に進められ、二三年四月までに全国小・中・高等学校の八三%までになつた。

笠戸小学校PTA

役員組織



三　学校の状況

(一)　位置　下松市笠戸本浦

東経　一三一度五一分二〇秒

北緯　三四度〇分五〇秒

(二)　校地・校舎

(1)　校舎敷地　一、八二一　平方メートル

(2)　屋外運動場　九九一　〃

(3)　建物延面積　七二一　〃

(4)　講堂　二一六　〃

(5)　普通教室　5室

(6)　保健室　1室

(7)　図書室　1室

(8)　理科室　1室

(9)　準備室　1室

(10)　図工室　1室

(11)　図書室　1室

(12)　音楽室　1室

(13)　給食室　1室

(14)　その他　2室

(三)　児童数

学年	男	女	計
1	4	3	10
2	9	1	9
3	5	1	6
4	11	5	16
5	4	6	10
6	8	3	11
計	41	19	60

(四)　特別活動担任

クラブ名	担任名
・卓球クラブ	校長
・家庭クラブ	河村・岩本
・習字クラブ	教頭
・音楽クラブ	若佐
・工作クラブ	飯田
・バドミントンクラブ	井藤

委員会名	担任
・整備委員会	河村
・掲示　〃	若佐
・放送　〃	飯田
・図書　〃	若佐
・緑化　〃	井藤

(五)

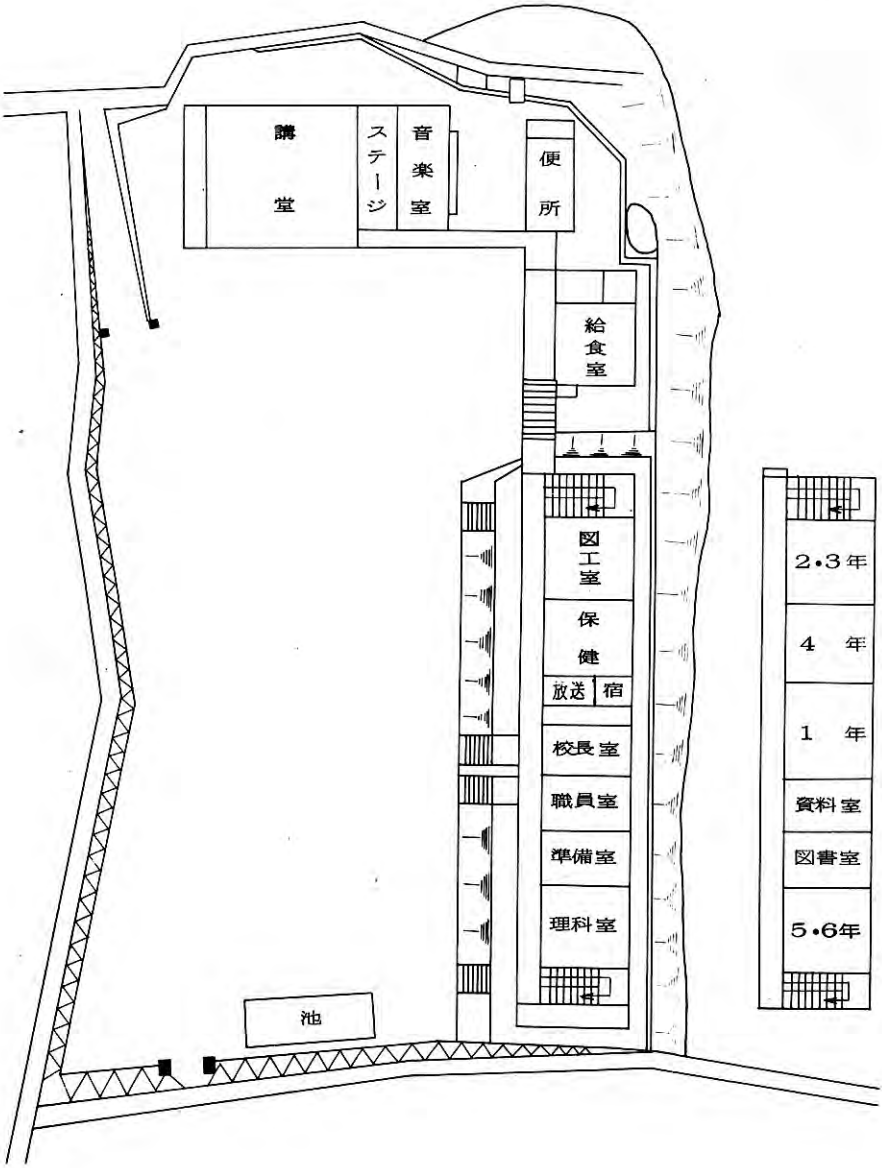
部団担任

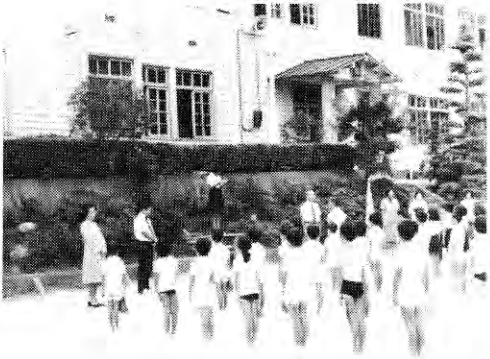
部団名	児童数	担任
・東風浦	3	河村
・本浦東	14	若佐
・本浦中	11	飯田
・本浦西	21	井藤
・尾泊・瀬戸	10	

(六)

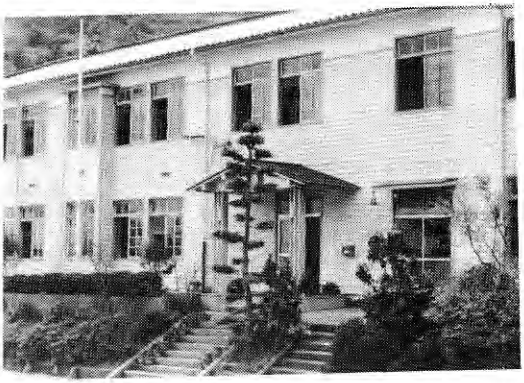
校時表

登校	八・一〇
朝の会	八・一五 ～ 八・二五
健康観察	八・二五 ～ 八・三〇
一校時	八・三〇 ～ 九・一五
二校時	九・二〇 ～ 一〇・〇五
業間体育	一〇・〇五 ～ 一〇・三〇
三校時	一〇・三〇 ～ 一一・一五
四校時	一一・二〇 ～ 一二・〇〇
給食準備	一二・〇〇 ～ 一二・一〇
給食	一二・一〇 ～ 一二・三〇
昼休み	一二・三〇 ～ 一三・一五
清掃	一三・一五 ～ 一三・三五
五校時	一三・四〇 ～ 一四・二〇
六校時	一四・二五 ～ 一五・〇五
終わりの会	一五・〇五 ～ 一五・二五
下校	一五・四〇


講堂
ステージ
音楽室
便所
給食室
図工室
保健
放送
宿
校長室
職員室
準備室
理科室
池
2・3年
4年
1年
資料室
図書室
5・6年



朝　　礼



校　　舎

学校の全景

登校風景

年　間　行　事

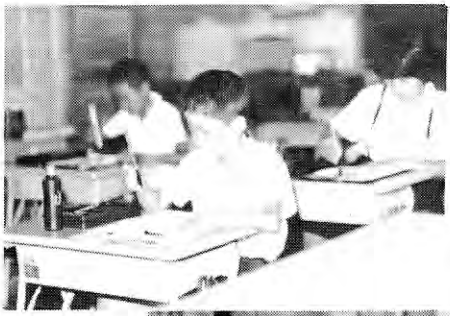
交通安全教育指導

水　泳　指　導

野　外　訓　練

マラソン大会

＜クラブ活動＞

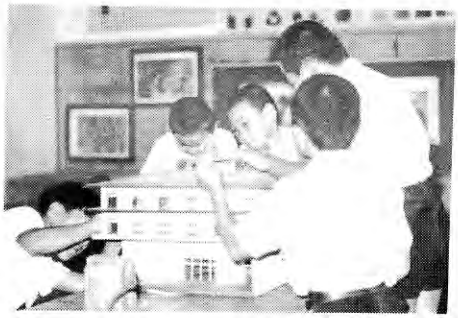


習字クラブ

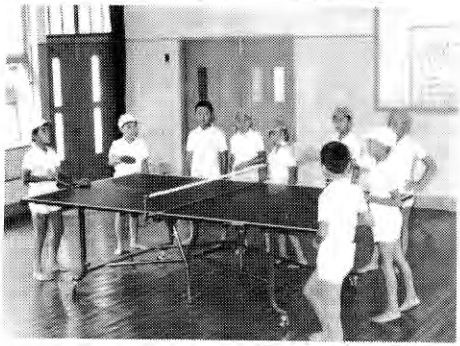
家庭クラブ

音楽クラブ

バトミントンクラブ



工作クラブ



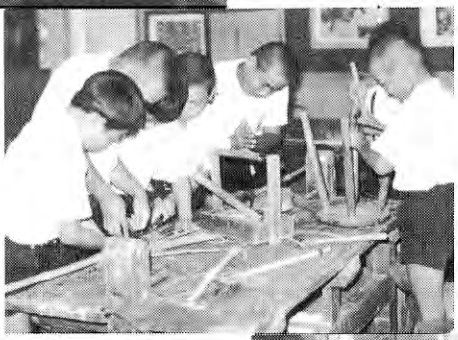
卓球クラブ

図　書　部

放　送　部

＜委　員　会　活　動＞

保健委員会

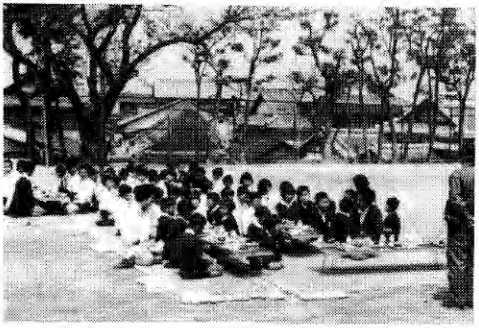


整備委員会

掲示委員会

緑化委員会

音　楽　祭

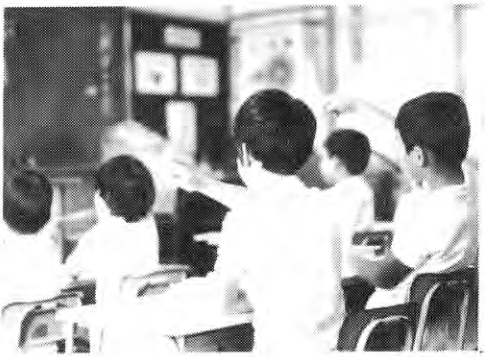


お花見給食

卒　業　式

農園作業

1　　年



1ねんせい
7名
なかよし

ぼくは、おっきいせんしゃみたいに
ちらんを　つちだにして。ぼっ
（はらだ　みつひろ）

ぼくは、きょじんのこばや
しみたいになりたいな。
（べにや　ゆきや。）

わたしはいぬやになり
たいです。
（はらだ　なおみ）

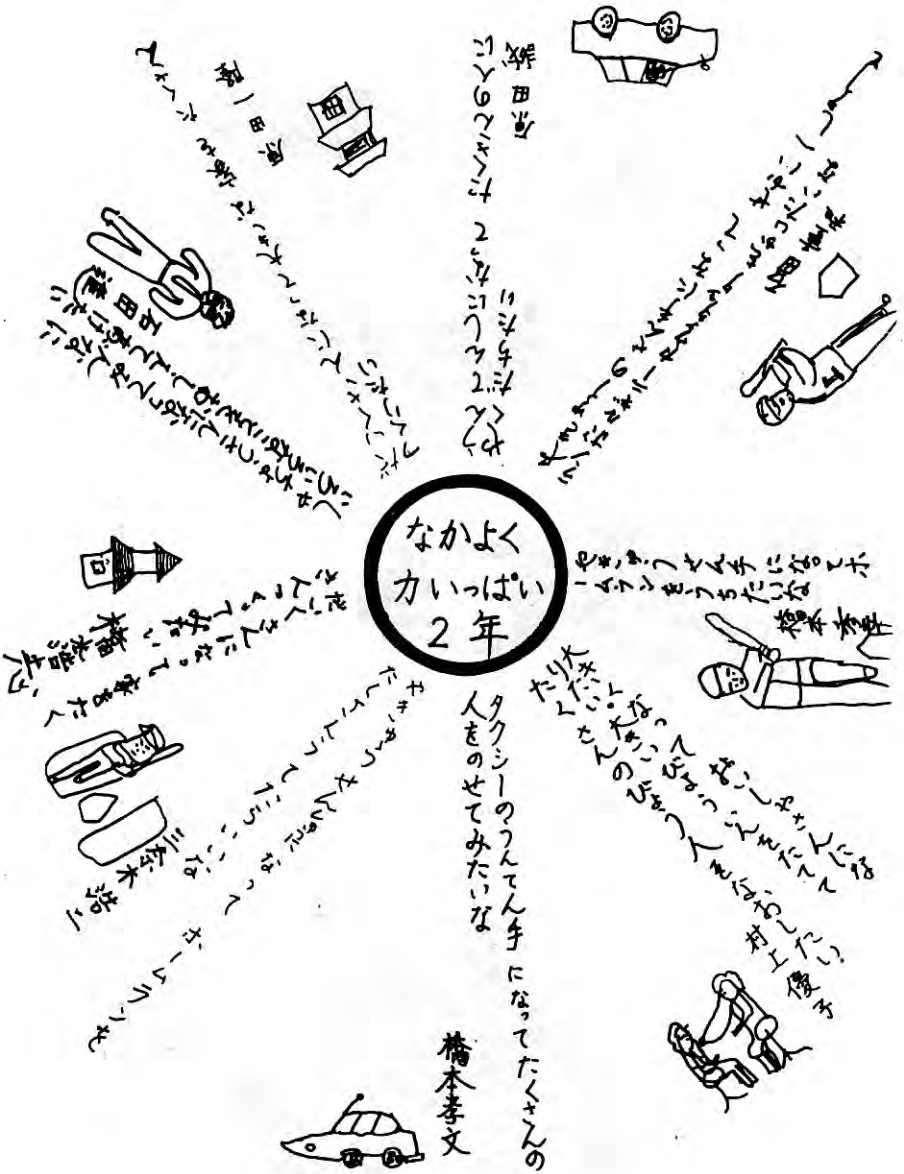
ぼくは、おもちゃやさんに
なりたいな。
（おぎき　だいのり）

ぼくは、がいしゃに　のりたいな。
（はしもと　なおき）

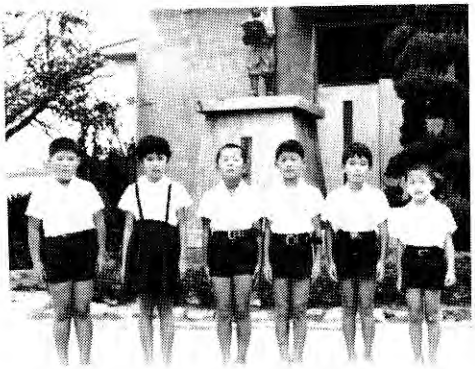
わたしは、小がっこうのせんせい
になりたいです。そして、こども
をうんでかしこいこに、そだて
たいです。
（ひろかわ　さちよ）

おおきくなったら
おかねもちになって
おかねをいっぱい
ためたい。
（ふじた　ゆうこ）

2　年

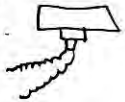

なかよく
力いっぱい
2年
タクシーのうんてん手になってたくさんの
人をのせてみたいな
橋本孝文

3　　年



こんな人になりたい

お腹が
いっぱいになって
ぐっすり寝ている
子どもたちに
絵本を読む
お母さん



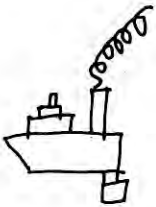
山本明幸

一緒に
なってしまう
ことがない

ちゃちゃ
ちゃちゃ
ちゃちゃ
ちゃちゃ
ちゃちゃ
ちゃちゃ
ちゃちゃ
ちゃちゃ
ちゃちゃ
ちゃちゃ

根気強く
たくましく
3年

ボールを
投げる
ときの
顔が
いいね
ピッチャーの
田口くん



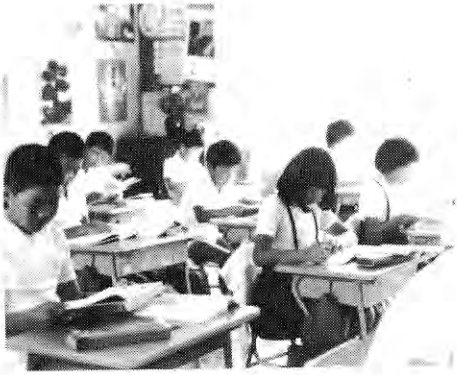
船にのって
人をのせて
どこまで
でもいきたい

中原正博

プロやきゅうの
選手になって
ホームランを
たくさんうちたい。

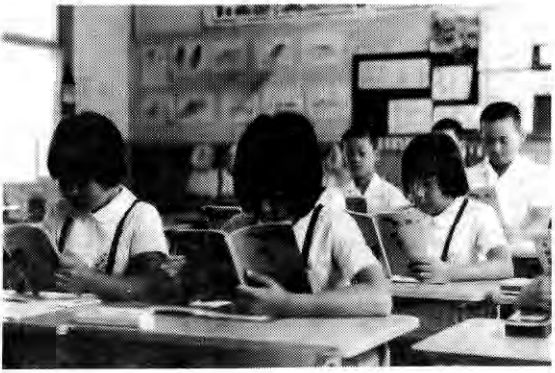
橋本典

4　　年



未来
4年
りょうしになりたい。三奈木信彦
りっぱな人になりたい。山中伸明
小学校の先生になりたい。
おお金持ちになりたい。
長距離トラックの運転手になりたい。
けいさつかんになりたい。
きれいな家にすみたい。西村玲子
岸本一則

5　　年



5年

友

木目 小林
石田真子
本当にありがとう
愛しかたをしりました
明日
ずっと
ずっと
ずっと
仲良く

情

森谷美穂
ずっと
ずっと
ずっと
仲良く

三枝
ずっと
ずっと
ずっと
仲良く

大田美美
やさしい
強い
人に
健康
に
勉強
をがんばる

太ろなうきん肉太り
人生根性
東風浦義和
人になりたい
笠本史
人生の
夢が
見つかる
海人
夢をなくさない

6　　年

6 nen
中
結
自主的な学習を
進めよう 直久

四、卒業生の思い出

三奈木　博

私が笠戸小学校に入学したのは、今から四四年前の昭和八年のことです。

当時の学校は、校長先生を含めて四人の先生で、全校複式の三学級でしたが、現在より児童数は多かつたようです。この頃は、落（おとし）や峠の浦（たんだ）のものは、山を越え、笠戸小学校に通学していました。それで私の同窓生は、男子一三名、女子一一名の二四名でした。

教科書のこと

入学のときのことで、今も覚えていることは、私たちのときから国語の教科書（読本）が変ったことです。それまでは、「ハナ、ハト、マメ、マス、ミノ、カラカサ……」という「ハナハト読本でした。

当時は、今のように、教科書が無償でなかったので、自分で購入しました。それで、兄姉や上級生にゆずりうけて使用する者も多くいました。私も、上級生の読本を借りて、入学前に、ハナ、ハトと、いつしようけんめい勉強していたのに、新しい読本を買つてみると、「サイタ　サイタ　サクラガ　サイタ」という、いわゆるサクラ読本だつたので、がつかりしたことを覚えています。

もうひとつは、一年の初期には石板と石筆で勉強したことです。

教科は、修身、読み方、書き方、綴り方、算術、国史（五年から）地理（五年から）理科（四年から）図画・唱歌・体操・裁縫（五六年女子）手工でした。

先生のこと

校長先生は一年から五年までは下村軍次先生で、六年のときは中倉勉先生でした。

下村校長先生（笠戸出身）には、修身をならいました。先生は、よく私たちを野外に連れ出して、おもしろいお話をしてくださつた。それでみんな修身の時間を待ちどおしがつていたようです。

私の直接の受持ちではありませんでしたが、隣に五郎丸先生という方が間借りしておられた。当時の先生は、今と違つて交通事情も悪く全員本浦に間借りされておられた。五郎丸先生は、玄米めしで、一日分を一ぺんに食べておられたというエピソードが残つています。また、校庭に植えられてあつたさく

らの木にさわると、「こらつ」と、よく叱られたものです。今のように大きく育つたのは、ひとつには先生のおかげが大きかつたと思つています。

六年の担任であつた、黒杭先生が、いちばん印象に残つています。先生が宿直のとき、友だちとよく遊びに行つてさわいだものでした。酒が好きでしたので、一升びんに、水を入れて酒とみせかけたいたずらもして先生を苦笑させたこともありました。また魚つりが好きで、休みには、りようしであつた父と、よく沖へ、魚つりに行つておられたようです。

先生の遺業の一つに、二宮金次郎の銅像の設立があげられます。

昭和14年3月卒業写真

毎晩、地区の有志や父兄の家をまわつて寄付をつのって建てられたものです。それが、戦争が激しくなり銅などの金属が不足してきたので銅像は供出され、そのあとに焼き物の像がおかれました。

儀式のこと

今は、祝日といつて学校は休みですが、私たちのころは、おごそかに式が行われました。その式は、新年（一月一日）紀元節（二月一一日）天長節（四月二九日）明治節（一一月三日）の四大節です。

儀式のある前日には、式場づくりと式の練習がありました。練習では、式の歌と、礼の練習が主でした。次式第で今と異つているのは、御真影に最敬礼（体を九〇度ぐらいまげた礼）・教育勅語奉読・式日の歌の斉唱です。

当日の式の前に奉安殿から式場に、御真影と教育勅語が正装した校長・教頭先生の手でうつされます。

その奉安殿は、終戦後にこわされ、そのあとに、九〇周年の記念碑が立てられています。

新年の式では、お祝いとして、学校からみかんをもらい喜んで帰つたことを覚えています。

一月一日

一年の始めの例しとて　二初日の光さし出でて
終わりなき世のめでたさを　四方に輝く今朝の空
松竹たてて門ごとに　君が御影にたぐえつつ
祝う今日こそ楽しけれ　仰ぎ見るこそ尊けれ

紀元節

一雲にそびゆる高千穂の　二海原なせるはにやすの
高根おろしに草も木も　池の面よりなお広き
なびき伏しけん大御世を　めぐみの波に浴みし世を
仰ぐ今日こそ楽しけれ　仰ぐ今日こそ楽しけれ

天長節

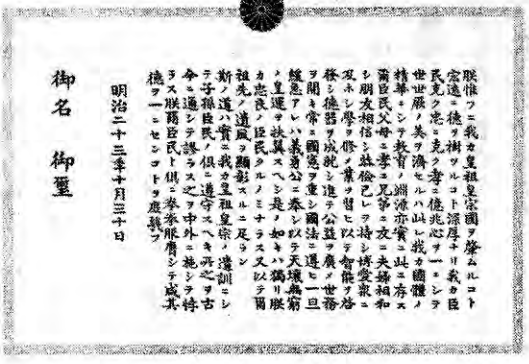
一今日のよき日は大君の　生まれ給いしよき日なり
今日のよき日は御光の　さし出給いしよき日なり
光あまねき君が代を　祝えもろ人もろともに
めぐみあまねき君が世を　祝えもろ人もろともに

明治節

一アジアの東日出ずる所　ひじりの君の現われまして
古き天地とざせる霧を　大御光にくまなくはらい
教えあまねく道あきらけく　治め給える御世尊と

修学旅行のこと

二泊三日の修学旅行は、伊勢神宮参拝、桃山、京都、奈良を見学してあるいた旅行で、都濃郡の小学校が連合して、一列車をかりきつて実施したものでした。汽車に乗つて旅をすることがめずらしかつた私たちは大喜びでした。生まれて初めての体験をした私たちは、帰つてから親たちにみやげの話で、花がさきました。



朕惟フニ我カ皇祖皇宗國ヲ肇ムルコト宏遠ニ德ヲ樹ツルコト深厚ナリ我カ臣民克ク忠ニ克ク孝ニ億兆心ヲ一ニシテ世々厥ノ美ヲ濟セルハ此レ我カ國體ノ精華ニシテ教育ノ淵源亦實ニ此ニ存ス爾臣民父母ニ孝ニ兄弟ニ友ニ夫婦相和シ朋友相信シ恭儉己レヲ持シ博愛衆ニ及ホシ學ヲ修メ業ヲ習ヒ以テ智能ヲ啓發シ德器ヲ成就シ進テ公益ヲ廣メ世務ヲ開キ常ニ國憲ヲ重シ國法ニ遵ヒ一旦緩急アレハ義勇公ニ奉シ以テ天壤無窮ノ皇運ヲ扶翼スヘシ是ノ如キハ獨リ朕カ忠良ノ臣民タルノミナラス又以テ爾祖先ノ遺風ヲ顯彰スルニ足ラン斯ノ道ハ實ニ我カ皇祖皇宗ノ遺訓ニシテ子孫臣民ノ俱ニ遵守スヘキ所之ヲ古今ニ通シテ謬ラス之ヲ中外ニ施シテ悖ラス朕爾臣民ト倶ニ拳々服膺シテ咸其德ヲ一ニセンコトヲ庶幾フ

明治二十三年十月三十日

御名　御璽

私たちが、卒業したのは、昭和一四年で、第二次世界大戦が始まつた年であり、下松市が誕生した年でもありました。

同窓生のうち二名失いましたが、二二名は健在です。

古老の話

語る人　原田米蔵　明治八年三月六日生
　　徳山在住　一〇二才八ケ月

司会　暑い中を、恐縮でございますが、笠戸小学校が百周年を迎えましたので、その記念に記録を残したく、昔の笠戸を憶い出してお話し下さるようお願い申し上げます。

原田　小学校ができる前の寺小屋のようすは。

　ありやあはあ光明寺ちゆう今でいう学校じやが、じようちゆう所にあつて習うちよつた。吉田先生といつて寺のおつさんが教えよつた。

司　生徒は何人おりましたか。

原　八人か九人じやつたろう。源太郎はあ、栄之進さあが行つたのう。八つから行きおつた女も三人おつた。

司　寺小屋の次の学校はどうでしたか。

原　八幡様の下で、かわら場ちゆうところへできて先生は村上先生ちゆうて、尾尻の人じやつたねたいゆさあじやつたね、平田学校ができたからあの学校へは行つちやいけんのいのう。

司　生徒は何人ぐらいおりましたか。

原　二〇人か三〇人ぐらいじやろう　よう知らん。

司　笠戸ではどんなことがありましたか。

原　昔は八幡様をよう大事にまつりおつたいね　春は神舞、秋は祭り、御神幸かきに行きおつた。たいこ山ちゆうのがあつたいの　四本柱で作り若いもんがかきに行きおつた　むかいじようの米屋のふさあはあが、たいこ山をええとこしろえたり、ええとせて、金がなくなつてのう　八幡様の下の方はあれいのじやつた。

司　家はどのぐらいありましたか。

原　九〇軒ぐらいじやつたろう　ほいでじげの人は八〇〇人ぐらいじやろう　白浜二、尾郷五、落一、端田(たんだ)五、はなぐり二、瀬戸二軒ではあそれしかない。寺のところは坊さんがぎようさん沖をついて開拓したもんで、ありやあの当時のまじや、あそこへ二軒家があつたね　ひつこんだところへもう一軒コクライ屋という家で、なかなかむつかしい人じやつたね（自分で大笑）

司　当時はどんな仕事があつたでしようか。

原　漁業はにしてと、栄太はあかたと、すおうなだぐらい。タコツボが四、五軒おつたろう。わしらあのときは、灰山行きが多いかつたのう。女も稲刈りに山口の方までも行きおつた。百姓は主に芋と麦じやつたね。まだじやが芋の作り方は知らんかつた。

司　石灰やきは誰がはじめたんでしようか。

原　あれかあ、ありやあ、松本やにはじめたいのう窯は墓ん原の西へあつたいのう。それか尾郷も松本屋がやつたから全部とつたいね、松本屋というのは島のためにやあなつたもんで。

司　船乗りはどのぐらいいましたか。

原　にしての前の、金べえさあ、松本屋のへりのじへえさあ、黒船で二本柱で、この船で御神幸を大阪から買つて帰つたんじや、春にはモバをとつて干して、こもう切つて、三田尻に積んで行つて米とかえてもろうたりした。

司　若い人は何をしていましたか。

原　若い人ちゆうても数が少いからのう。わしらあ打瀬網をよくやつたいのう。帆を海ん中へつけて汐に流れて漕ぎおつたね。上手になつたら、沖のと（豊後水道）まで行つて、大きいのをとりおつたのう。それから別府へ行きよつた。

司　下松に行くときはどうでしたか。

原　ありやあ年に二回ぐらいで、妙見様までじやね瀬戸を渡つて、ありやあ五厘じやつた。その渡舟をやるのが廃藩になつて、フチがなくなつた女がね、やりよつた。それから宮ノ州の灯台がね　村がやるんなら灯がつくんじやつたのに、とうとう灯がつかんじやつた。

司　おわりに長生きのひけつを。

原　とにかく云いつけをわすれさえせんにやあええ子供のときから教えられたことを忘れんことねそいから年をとるに従つて、こけんように気をつけんにやあいけん。酒でも飲んで覚えんようになるのがまちがいね。わしは年をとつて酒も煙草もやめたいねえ。

司　おじいさんは、徳山の宝です。どうかこれからも元気に長生きして下さい。

昭和五二年八月二六日　本人宅にて

第三編

名簿

歴代校長名簿

初代	古本多助	明三四・四～
二代	福谷寅吉	不明
三代	古本多助	不明～明四〇・三
四代	村井又四郎	明四〇・四～明四三・一〇
五代	吉本遠次郎	明四三・一〇～大四・三
六代	田村正作	大四・四～大八・三
七代	藤井真作	大八・三～大九・四
八代	藤井民部	大九・四～大一一・三
九代	田村政治	大一一・四～大一四・三
一〇代	下村軍次	大一四・四～昭一三・三
一一代	中倉　勉	昭一三・四～昭一七・
一二代	為久恒介	昭一七・四～昭二一・三
一三代	岩本熊蔵	昭二一・四～昭二四・三
一四代	藤井　勝	昭二四・四～昭二五・三
一五代	井上　勲	昭二五・四～昭二九・三
一六代	角　為一	昭二九・四～昭三三・三
一七代	倉田照雄	昭三三・四～昭三七・三
一八代	木原　博	昭三七・四～昭四一・三
一九代	勢一輝雄	昭四一・四～昭四四・三
二〇代	好山猪住	昭四四・四～昭四七・三
二一代	藤沢　博	昭四七・四～昭五一・三
二二代	佐々木雄造	昭五一・四～現在

歴代PTA会長

初代	橋本徳治	昭二四・四～昭三〇・三
二代	岡村松義	昭三〇・四～昭三二・三
三代	浜崎惣治	昭三二・四～昭三三・三
四代	岡村松義	昭三三・四～昭三六・三
五代	橋本延治	昭三六・四～昭三九・三
六代	原田清義	昭三九・四～昭四一・三
七代	武居謹一	昭四一・四～昭四五・三
八代	橋本弥恵次	昭四五・四～昭四九・三
九代	橋本敏夫	昭四九・四～昭五一・三
一〇代	土本　薫	昭五一・四～現在

歴代教職員名簿

（大正四年以降）

田村正作	大4～8	重田キヨ子	昭2～3	中倉　勉	昭13～16
長谷川ヤエ	〃4	小川ヨシ子	〃2	山角恵二	〃13～14
大枝　豊	〃4～8	長広一雄	〃3～4	黒杭靱負	〃14～18
森下カネ	〃5～6	神杉一男	〃4～5	松原初恵	〃14
棟近トヨコ	〃7	秋本静子	〃4	川口忠夫	〃14
藤井真作	〃8	吉本藤子	〃4～8	上田富子	〃15～17
太田ウラコ	〃8～12	橋本朝一	〃5	国政正臣	〃15～17
下村軍次	〃8～昭12	山田清雄	〃6～7	為久恒介	〃17～20
藤井民部	〃9～10	石田勝馬	〃6～7	下瀬梅子	〃18～21
田村政次	〃11～14	五郎丸熊二	〃8～9	藤井　操	〃18～
藤村ミツ	〃13	棟近熊一	〃8～11	内山　穣	〃19～21
久野ツユ子	〃14	田辺キクエ	〃9～13	内山茂樹	〃19
久野敏助	〃14	兼平道作	〃10	石田トシ子	〃19～21
山本康子	〃15	岡野藤一	〃11～13	近藤昭江	〃19
福田増一	〃15	山本邦司	〃12	左海久子	〃20
吉木一勇	昭2～3	河村斗馬	〃12～13	藤井勝一	〃20
				岩本熊蔵	〃21～23
				押方敏春	〃21～24
				田畑テル子	〃21
				松本英吉	〃22

兼弘恵美子	昭22	藤本江美子	〃26
三奈木　博	〃23～29	土田寿磨子	〃25
岩本典子	〃22～23	原田克文	〃25
松野　勉	〃23	斉藤洋一	〃25～26
橋本節恵	〃23	藤井　勝	〃24
福本民子	〃23～24	河口虎雄	〃23
河村三千代	〃23～24	二家本治作	〃28～31
河口虎雄	〃23	井上　勲	〃25～29
藤井　勝	〃24	岩崎智恵子	〃28～29
斉藤洋一	〃25～26	弘中辰男	〃28
原田克文	〃25	吉田光枝	〃28
土田寿磨子	〃25	兼弘冨士己	〃28～29
藤本江美子	〃26	浜崎京子	〃28～31

原田幸子	昭28～30	重信久人	昭35	中谷リエ子	昭44～46	水車　浩	昭46～49
角　為一	〃29～32	棟居正良	〃35	山本　保	〃43	藤沢　博	〃47～50
有園敬子	〃29～30	橋本澄子	〃35～36	田中紀子	〃43	柳　章	〃47～51
武居美智子	〃29～30	松村真人	〃36～38	好山猪住	〃44～46	松村和枝	〃47～50
山野井恒雄	〃29～30	安達長敬	〃36～37	福山賢造	〃44～45	河野美佐保	〃49～51
三奈木アサ	〃29～30	田中セツ子	〃36	河本ツヤ	〃46～48	尾川佳己	〃49～51
小林哲夫	〃30～32	木原　博	〃37～40				
中原敦子	〃30～50	有馬　始	〃37～39				
並川喜美子	〃31～34	橋本洋子	〃36～40				
吉岡久夫	〃31～33	合田澄夫	〃38～40				
堀　幸子	〃31～32	山崎梅野	〃39～41				
原田邦子	〃31～38	為国一男	〃39				
武居正美	〃32～34	下村邦子	〃39～43				
倉田照雄	〃33～36	河本寅雄	〃40～42				
有間スミ子	〃33	田村一憲	〃40～42				
鳴川寿雄	〃33～34	勢一輝雄	〃41～43				
戸村政代	〃33～	秋山悦子	〃42～45				
福場久人	〃34	増原麗子	〃42				
清木　晃	〃35～36	大橋砂子	〃42				
貞木智恵子	〃35～36	小林繁雄	〃43～46				

◇現在籍教職員名簿

○校長　△教頭

○佐々木　雄造　昭51　厚狭郡楠町吉部
△山本　律子　〃52　徳山市大島大原
飯田　容晨　〃50　下松市東時宗
井藤　純雄　〃51　下松市東中村
河村　雅恵　〃50　下松市花岡常森
若佐　公子　〃52　岩国市旭町
吉賀　トヨ　〃50　下松市東柳
原田　美保子　〃40　下松市笠戸島本浦
武居　チエ子　〃51　下松市笠戸島本浦
岩本　真理子　〃52　下松市旗岡

後列左から
若佐　吉賀　原田　武居　岩本
前列左から
井藤　河村　佐々木　山本　飯田

卒業生名簿

卒業年度氏名	現住所
明治一八年三月卒	
笠本捨次郎	物故者
中原右衛門	〃
山本仁平	〃
山本六右衛門	〃
明治一八年一〇月卒	
石田重吉	〃
下村国蔵	〃
西村光蔵	〃
橋本与作	〃
原田米作	〃
明治一九年三月卒	
原田喜一	〃
吉本多助	物故者
原田庄之助	〃
原田弥吉	〃
浜崎伊吉	〃
明治二六年三月卒	
橋本季平	〃
明治三五年三月卒	
原田瀧平	
橋本均	
岩崎アキ	
原田栄一	物故者
弘中武八	〃
弘中槌蔵	〃
山本市五郎	〃
中原秀治	〃
守田セイ	〃
明治三六年三月卒	
村上柔蔵	
岩本タマ	落
原田サト	尾郷
西村サキ	
原田玉之助	物故者
原田一馬	〃
原田馬吉	〃
藤井仁五郎	〃
橋本宇市	〃
原田重吉	〃
藤井末吉	〃
橋本求馬	〃
原田徳治	〃
藤井シゲ	〃
岡村カン	〃
東風浦トメ	〃

卒業年度	氏名	現住所
明治三七年三月卒		
	草刈耕治	河村丈市
	橋本ハル	物故者
	原田ミチ	
	藤井ハツ	
	原田フキ	
	原田リツ	
	橋本ユキ	
	岡村モミ	
	中原ヒサ	
	原田ヒサ	
	原田シユ	
	村上フミ	
	三奈木ヨシ	
	橋本キサ	
	中原シカ	
	原田周一	物故者
	原田敏雄	〃
	原田千代三	〃

卒業年度	氏名	現住所
	橋本タネ	〃
	岩本イセ	〃
	三奈木ウエ	〃
	橋本カネ	〃
明治三八年三月卒		
	山本常三	尾郷
	山本盛之助	
	住田房一	
	東風浦秋信	
	橋本ハナコ	
	橋本スミ	
	原田トヨ	
	原田カヨ	
	中原ヒサ	
	橋本ウメコ	
	石田ミネ	
	原田ハツ	

卒業年度	氏名	現住所
	原田ハツ	
	古本ヨシ	
	古本アキ	
	山本ツイ	尾郷
	原田アキ	
	古本道正	物故者
	武居仁三郎	〃
	村上嘉右衛門	〃
	橋本金市	〃
	橋本修治	〃
	橋本熊市	〃
	東風浦音三郎	〃
明治三九年三月卒		
	吉川元治	尾郷
	弘中岩七	高砂町
	中原セキ	
	橋本シズエ	
	橋本コメ	

村上タカ
原田（安藤）キヨメ　尾郷
弘中サヨ
藤井イネ
市川コト　落
笠本アキ
原田キミコ
原田スギ
橋本フユ
橋本ツマ
河村ツナ
原田クニ
原田ハヤ
原田フジ
中原寿一　物故者
石田仲右衛門　〃
岩本嘉市　〃
岡村七五郎　〃
市川マサ　〃
岩本モミ　〃

明治四〇年三月卒
繁本茂作　東
山本（竹尾）松蔵　尾郷
藤井金次郎
村上啓太郎
原田惣三郎　物故者
橋本金次郎　〃
山本友一　〃
橋本坂太郎　〃
中原真作　〃
三奈木伝吉　〃
藤井太一　〃
原田稲杉　〃
岩本末市　〃
市川九一　〃
土本ハル　〃
橋本マサ　〃
岩本ハツ　〃
原田モミ　〃
武居ハル　〃

笠本キシ　物故者
橋本チヨ　〃

明治四一年三月卒
岩本茂一　尾郷
住田友三　二の宮町
橋本ウサ子　深浦
山本ツギ　尾郷
下村軍次　物故者
橋本音幸　〃
弘中巽　〃
橋本和夫　〃
下村酉八　〃
西村勇　〃
原田嘉十　〃
守田富雄　〃
橋本七五郎　〃
岩本久一　〃
岩本儀三郎　〃

卒業年度	氏名	現住所
明治四三年三月卒		
	橋本ウサ子	深浦
	原田ムラ	物故者
	弘中巽	〃
	橋本和夫	〃
	西村勇	〃
	岩本儀三郎	〃
	東風浦政吉	〃
	原田嘉十	〃
明治四四年三月卒		
	市川五一	落
	岡村政一	峠ノ浦
	原田ツル	
	石田シユン	瀬戸
	河村トモ	
	森田カツエ	
	村上ハルメ	
	東風浦丈助	物故者
明治四五年三月卒		
	橋本唯一	物故者
	橋本音吉	〃
	原田七三郎	〃
	三奈木又一	〃
	原田辰五郎	〃
	吉川忠雄	〃
	中原寿恵松	〃
	原田嘉平	〃
	東風浦金兵衛	〃
	橋本源吉	〃
	盛田米吉	〃
	笠本セキ	〃
	橋本ナヲ	〃
	原田アイ	〃
	村上タケ	〃
	木戸キミ	〃
	原田信一	東
大正二年三月卒		
	岩本清市	落
	原田ウマ	西
	渡辺（藤井）キク	中
	橋本勘作	物故者
	岡村辰之助	〃
	原田利市	〃
	原田マサヨ	〃
	武居トミ	〃
	橋本正作	東
	橋本清市	白浜
	山本広市	
	原田（中原）乙一	東
	原田梅市	尾泊
	弘中サメ	
	角キヨ	尾郷
	下村ハツネ	
	中原キク	

山本アヤメ　岩本リウ　落
笠本ハルメ　河村ヲツネ吉　原
中原ユキ　渡辺（柳）マスコ栄　町

大正四年三月卒

西村（橋本）ムラ　東　中原ユキ香　力　山本登一　尾　郷
土本　文右衛門　物故者　岡村ハル峠ノ浦　西村ツギ　中
橋本茂雄　〃　橋本多我雄物故者　川崎キミ吉　原
三奈木秋蔵　〃　橋本文一　〃　弘中（松永）シマコ大　島
原田茂男　〃　浜崎梧市　〃　吉川園枝尾　郷
東風浦政吉　〃　笠本　稔　〃　岡村ソモ峠ノ浦
西村秋次　〃　原田栄作　〃　原田（信友）シモ久保市
原田正一　〃　土本総市　〃　原田タケ開　作
原田与市　〃　石田重治郎　〃　西村（三奈木）ミサヲ　中
石田弥太郎　〃　盛田ツタ

大正三年三月卒

原田庄助　市川　喜代之進　〃　原田豊吉尾　郷
原田儀一尾　郷　原田ヲヒデ　〃　中原成作物故者
笠本トシコ　〃　原田秀雄　〃
三奈木好江中　岡村ツヤ　〃　古本一雄　〃
岩本繁吉落　岩本ハル　〃　藤井周治　〃
笠本ヤエ瀬戸　岩本テル　〃　橋本登一　〃
橋本タケノ宮の州　岩本シイ　〃　橋本竹男　〃

卒業年度	氏名	現住所
	山本武一	物故者
	中原ウメ	〃
大正五年三月		
	下村利吉	中
	三奈木勘蔵	阿知須
	原田菊一	尾泊
	藤井政治	峠ノ浦
	橋本ミヤコ	尾泊
	原田キサ	中
	藤井（中谷）セイ	平田
	西村ウメコ	幸町
	原田信春	物故者
	笠本虎雄	上栄町
	岩本品吉	物故者
	岩本政一	〃
	田中ヤエコ	〃
	橋本アキノ	〃
	橋本来次	〃

卒業年度	氏名	現住所
大正六年三月卒		
	西村茂徳	山
	原田辰二	小倉
	石田幸吉	瀬戸
	中原与平	
	河村登一	徳山
	市川隼作	落
	山本五作	尾郷
	岩本外一	落
	橋本サヨエ	
	中原タキ	平田
	原田（橋本）サト	中
	橋本ミチ	
	原田熊一	物故者
	藤井初夫	〃
	岩本増夫	〃
	原田モト	〃
	西村ナツ	〃
	岩本ツネ	〃

卒業年度	氏名	現住所
	岩本ユリ	物故者
大正七年三月卒		
	西村一	
	田村絢子	
	原田ヨ子コ	尾郷
	橋本（三奈木）ウタ	東
	石田キク	
	中原ハル	
	中原ヒサ	
	原田タマヘ	
	橋本ヨシ子	
	橋本（長本）スエ	浅江
	西村泰油	中
	橋本益江	物故者
	西村幸治	〃
	原田義久	〃
	岩本仲十	〃
	原田ヨマツ	〃

中原ヒデ　物故者
岩本ユリコ　〃

大正八年三月卒

土本富平　西
浜崎惣治　東
浜崎誠治　宇部
三奈木正一　東
山本新一　尾郷
笠本キヨコ
原田セキ　瀬戸
山本シスコ　尾郷
原田マサ
岩本準一　落合
原田権七　物故者
下村源吉　〃
藤井清　〃
村上道雄　〃
原田鹿吉　〃
西村シマコ　〃

橋本ムラ　物故者
原田ユリ　〃

大正九年三月卒

土本椎子　西
岩本（伊藤）敏一　落合
三奈木クイ
三奈木ハツコ
原田ハルエ
三奈木ハツエ
盛田三郎
橋本庄一
市川ユキ　北網代
中原義美　物故者
土本富治　〃
武居鹿之助　〃
吉川繁明　〃
中原満　〃
笠本コノ　〃
橋本啓之丞　〃

岩本クメ　物故者
西村銀一

大正一〇年三月卒

橋本品一　西
橋本実雄　来巻
山本豊　西
橋本万助　東
原田捨治　北九州市
橋本豊　中
原田吉雄　中
武居広雄　八代
浜崎ツネ　東
橋本ナミ
原田チヨコ
西村アサ子
中原（土本）ヒナコ　中
橋本セツコ
藤井テルコ
三奈木ウメコ

卒業年度氏名	現住所
岡村　七右ェ門	物故者
村上　市男	〃
原田　二一	〃
中原　団一	〃
中原　キイコ	〃

大正一一年三月卒

卒業年度氏名	現住所
弘中　与作	都町
原田　房男	
村上　梅市	生野屋
笠本　貢	西
盛田　作一	北網代
原田　アヤ子	尾郷
橋本（石井）ソノエ	江ノ浦
三奈木（相本）クラ	高砂町
橋本　ハツコ	
山本　於長	尾郷
石田　トミエ	
岩本　ヲフミ	落

卒業年度氏名	現住所
土本　平吉	物故者
西村　寿雄	〃
石田　房一	〃
市川　実	〃
原田　富雄	〃
岩本　林一	〃
原田　イト	〃

大正一二年三月卒

卒業年度氏名	現住所
村上　豊一	西
西村　都一	秋穂
橋本　義雄	
下村　豊一	深浦
橋本　仙之助	東
原田　鹿一	
橋本　功	中
河村（小島）勇夫	尾泊
竹尾　寿郎	尾郷
岩本　登一	落

卒業年度氏名	現住所
中原　成子	
原田　キクエ	
原田　イト	尾郷
山本　ヲユカ	〃
山本　ヒナ子	〃
武居　ヒデ子	
原田　ヨシ子	物故者

大正一三年三月卒

卒業年度氏名	現住所
村上　清徳	山
村上　行正	
三奈木　栄槌	東
三奈木　市夫	
原田　時雄	東風浦
橋本　常一	
山本　悟市	尾郷
原田　正人	新南陽市
中原　参正	西
吉岡　幸進	

中原サキコ　防府　石田庄助　瀬戸
原田チヨノ　西　橋本亦古　川町
尾茂アヤコ　尾郷　中原武雄　中
原田チエ子　三奈木嶋市　新南陽市
藤井ハルコ　武居八五郎　福山市
守田フシ子　山本外一　尾郷
原田・フミ　尾郷　原田義市
中原芳雄　物故者　藤井園助　峠ノ浦
中原日吉　〃　中原勇　尾泊
橋本重太郎　〃　山本和一　尾郷
西村時正　〃　早本タマエ　中
岩本正一　〃　橋本アキヨ　江ノ浦
浜崎タカ　〃　原田サツ子
橋本ナツ　〃　河村ユキノ　上香力
原田シズエ　東
大正一四年三月卒
岩本（宮本）コメ　深浦
三奈木定一　中原ウメ
橋本熊市　二の宮町　土本安衛　物故者
三奈木（岡村）松義　東　弘中寿作　〃
原田実　西　原田竹広　〃

中原正志　物故者
原田正見　〃
武居初一　〃
原田年雄　〃
原田千トセ　〃
原田マサコ　〃
川崎キヨノ　〃
大正一五年三月卒
原田幸政
村上正一
下村正一　中
西村一郎
橋本（伊勢崎）熊之助　宮の州
岩本達己　大阪
橋本久繁　中
市川高雄　平田
渡辺ウメコ
原田（長浦）キヨ　深浦
橋本（山中）ヲセイ　中

卒業年度氏名	現住所
山本ハルコ	尾郷
藤井時春	物故者
橋本新一	〃
木戸真	〃
浜崎ヌイ	〃

昭和二年三月卒

卒業年度氏名	現住所
橋本泉	西
三奈木高好	中
橋本石二	西
原田（橋本）カネ	東
三奈木（橋本）ユワ	東
石田勇	物故者
藤井行雄	〃
村上秋広	〃
橋本俊次	〃
村上美三茂	〃
原田末市	〃
舞田茂雄	〃
中原保	物故者
橋本利一	〃
中原実	〃
弘中ムナ子	〃
橋本ツキノ	〃
岩本マサエ	〃
三奈木フミ子	〃
笠本ラクエ	〃
橋本サナエ	〃
原田リエ子	〃

昭和三年三月卒

卒業年度氏名	現住所
三奈木春正	光市浅江和田住宅
古本保雄	中
笠本清一	法蓮寺
山本信春	港町
橋本（常深）梅子	神戸
山本嵩	物故者
原田勇治	〃
藤井三十四	物故者
橋本格	〃
中原シズエ	〃
原田ナツ	〃
原田シズエ	〃
原田八重子	〃
山本チエ子	〃
西村ヨシコ	〃
山本マツエ	〃
橋本キミコ	〃
原田ハナエ	〃

昭和四年三月卒

卒業年度氏名	現住所
原田佳尚	中
中原重春	高砂町
原田清義	中
川崎喜敏	北九州市
浜崎（中原）和一	東
原田悟	白砂

守田甲一　徳佐
原田(三奈木)ミヤコ　東
藤井(溝内)一二三　中
橋本(中原)カネヨ　東
原田(橋本)サトノ　中
山本琢美　物故者
西村・五十正　〃
弘中彰　〃
原田貞信　〃
橋本富治　〃
山本茂　〃
橋本金作　〃
渡辺義信　〃
原田ユクエ　〃
原田マツ　〃
村上千代子　〃
中原キミエ　〃
橋本スミエ　〃
原田サト　〃
市川ヒナ　〃

昭和五年三月卒

橋本キミヨ　物故者
市川フユ子　〃
岩本イト　〃
西本安雄　西
武居正信　東
村上栄　西
森田(上野)キマ　住吉町
東風浦(木戸)ソモ　尾泊
三奈木(山中)ハルコ　西
下村好広　物故者
橋本一喜　〃
原田定人　〃
橋本太郎　〃
中原藤一　〃
羽島勝美　〃
石田八重子　〃
山本シズエ　〃
岩本シズエ　〃

藤井テルコ　物故者
橋本カズエ　〃
藤井サハエ　〃
舞田マサエ　〃
笠本ウメコ　〃
木戸ヨシ　〃

昭和六年三月卒

原田外衛　東
原田永次花　岡
橋本富美子　物故者
原田ヨシ　〃
藤井チヨ子　〃
山本友治　〃
三奈木朝子　〃
石田義美　〃
山本明　〃
中原友久　〃
村上カナエ　〃
村上幾松　〃

卒業年度	氏名	現住所
	橋本サダ子	物故者
	橋本ヨシ子	〃
	藤井ヨシ子	〃
	原田艶子	〃
	羽島早見	〃
	橋本済松	〃

卒業年度	氏名	現住所
昭和七年三月卒		
	古本辰夫	竹原市
	橋本隆彦	花岡
	山本豊尾	郷
	原田要	下関
	中原敦子	中
	守田（武居）ヒマ	東
	原田岩夫	物故者
	橋本光友	〃
	三奈木寛二	〃
	原田翠	〃
	藤井二三四	〃

卒業年度	氏名	現住所
	岩本マスコ	物故者
	市川アキ	〃
	松本シゲコ	〃
	山本キクコ	〃
昭和八年三月卒		
	三奈木節夫	光市上島田
	下村冷七	中
	山本松広	水島市
	三奈木（中原）恭二	中
	石田栄	瀬戸
	橋本延治	東
	村上友広	楠木町
	原田（下村）サトエ	中
	河村月江	上香力
	松原義見	
	木戸哲雄	物故者
	山本勘一	〃
	岩本トミコ	〃

卒業年度	氏名	現住所
	原田カヅエ	物故者
	舞田リエコ	〃
	橋本エミコ	〃
	武居トミコ	〃
	西本時子	〃
昭和九年三月卒		
	原田金光	東
	原田繁美	東
	橋本勲	大手町
	繁本東	東
	原田幸雄	東
	藤井進	中
	岩本マサ神	戸
	岩本マツエ	大分県杵築市
	橋本コメノ	
	原田栄一	物故者
	橋本猛	〃
	西村正作	〃

山本正春　物故者　山本（宮西）カノル　尾泊　三奈木（中原）末義　中

原田初見　〃　石田アサコ　土本昇平　西

藤井秋夫　〃　原田カネ　藤井茂信

弘中鶴与　〃　原田タカエ　下関　橋本岩次　徳山大島

竹尾ハナ子　〃　松本ユキエ　岩本泰行　落

橋本チヨ子　〃　藤井（新田）イサ子　大阪　市川末男

原田ヤエ子　〃　中原キミエ　中原キクノ　中

西村スズエ　〃　岩崎（原田）シズエ　来巻　橋本（藤田）キクエ　恋ケ浜

中原キヨノ　〃　橋本亨之　物故者　石田（木村）ヨネ子　高砂町

橋本ヒサヨ　〃　西本喜進　〃　藤井マサ子

弘中武治　〃　棟近（吉岡）シズ子　尾泊

市川広雄　〃　宮木マレノ　東京

山本幸治　〃　原田ミヨコ　峠ノ浦

山本光夫　〃　橋本マツエ　白浜

原田猛　〃　岡村石男　物故者

西村ヨシ子　〃　武居銀一　〃

原田親子　〃　原田剛　〃

原田初二　〃

村上武人　〃

村上馨　〃

昭和一〇年三月卒

原田（安村）士郎　周東町高森

原田又幸　西

三奈木繁雄　住吉町

笠本松次瀬戸

東風浦坂江　東風浦

古本花子　新南陽市

橋本光枝　東京都

昭和一一年三月卒

橋本アヤ子　原田治幸　四日市羽津東曹住宅

卒業年度	氏名	現住所
	舞田一人	物故者
	浜崎マサ子	〃
	橋本タツエ	〃
昭和一二年三月卒		
	橋本義人	都町
	原田幸繁	東
	橋本秋好	尾泊
	繁本（原田）金次	中
	石田保	楠木町
	橋本一義	〃
	岩本操	尊落
	市川聡	落
	弘中（古本）ツネ子	中
	石田タマエ	宮前
	河村（笠本）佐津子	瀬戸
	松本マツ枝	
	盛田ウサ子	岩国市車町
	古本時雄	物故者

卒業年度	氏名	現住所
	山本桂	物故者
	中原スミ子	〃
昭和一三年三月卒		
	原田幸男	昭和通り
	中原広人	東
	渡辺茂	中
	三奈木悟作	
	村上重信	東
	岩本里示	落
	中原出恵	東
	岩崎ミツエ	花岡
	東風浦（中原）シズエ	東風浦
	藤井八重子	
	原田直一	物故者
	原田次雄	〃
	藤井順一	〃
	中原アヤ子	〃

卒業年度	氏名	現住所
昭和一四年三月卒		
	橋本愛治	半上
	原田鉄信	港町 原田石油店
	橋本弥恵次	中
	下村重孝	中
	橋本勝之	下関市垢田
	三奈木博	西
	橋本清之	東光寺
	橋本幸男	東開作
	古本春正	西
	土本信雄	吉敷町
	岩本勇	
	原田茂	生野屋
	橋本（武居）哲子	中
	原田（半田）静政	米川
	藤井（原田）シゲ子	中
	原田多喜子	東
	河村（西村）イサ子	中
	笠本（原田）シゲ子	西

山本（谷）美枝子　久保
石田トシ子　徳山市金剛山
藤井（温品）クマ子　徳山市櫛浜
繁本（杉本）マツ子　物故者
原田昭　〃
橋本キヌ子

昭和一五年三月卒

中原勇　東風浦
中原定　光市御崎町
中原桝登　柳
西村加喜和　中
三奈木益男　光市浅江
石田馨　高砂町
東風浦勝男　東風浦
西村昭正　久保市
原田照雄　峠ノ浦
岡村栄太
原田ウメ子
田中アサ江

高浜アヤ子
原田悦二　物故者
中原正育　〃
藤井義一　〃
弘中一正　〃
武居ヤス子　〃

昭和一六年三月卒

東風浦才治　東風浦
原田克文　西
村上安彦　西
西本直人　大阪
村上秋男　西市西
石田輝楠　木町
原田太吉　尾泊
土本龍雄　切山下
中原（原田）美代子　尾泊
橋本（原田）清子　東
原田充子　中
三奈木（原田）シマ子　東

村上（溝部）ヒデ子　大町
岩崎（土本）フミエ　西
石田（藤井）フサエ　久保山田
橋本（内山）恵美子　西河原
弘中シイ子　西
棟近（村上）フサ子　高砂町
福迫ハル子　鹿児島
渡辺町子　物故者

昭和一七年三月卒

西村正雄　中
河村多喜夫　西
藤井音幸　千葉県松戸市
三奈木明　あけぼの町
楢原照光
橋本マサエ
原田美津子
土本（鬼武）タマ子　西柳
藤井キク子
下村（可村）千代乃　山田

卒業年度	氏名	現住所
	原田幸子	徳山市
	弘中（藤村）キヨ子	青山町

昭和一八年三月卒

卒業年度	氏名	現住所
	東風浦隆	西
	原田博光	東
	原田喜作	
	西村幾義	中
	岩崎一雄	旗岡
	石田明	花岡昭和
	繁本清	上平田
	橋本敏夫	東
	中原文人	山根
	中原孝子	
	三奈木タツ子	
	田中ツタ江	
	原田貞子	西
	笠本（江田）露子	寺迫
	橋本（新国）喜佐子	上香力

卒業年度	氏名	現住所
	土本（八木）タカ子	上地
	橋本（松本）桂子	吉敷町
	橋本（井生）ナツ子	熊毛町遠見
	西村（吉富）ヤスエ	美祢郡美東町
	原田セツ子	
	守田（清木）房子	
	山田（西本）シズ子	奈良県
	三奈木清文	

昭和一九年三月卒

卒業年度	氏名	現住所
	橋本春之助	東光寺
	早本孝士	中
	西本健三	奈良県生駒
	山本安二	呉市吉浦
	橋本隆義	法蓮寺
	中原義一	広島市
	原田美代子	尾泊
	土本イセ子	
	弘中（松村）スミ子	光市浅江

卒業年度	氏名	現住所
	武居（大村）リツ子	西
	村上（藤山）ヤス子	広島市
	浜崎（橋本）京子	中

昭和二〇年三月卒

卒業年度	氏名	現住所
	東風浦義男	西
	藤井政彦	
	河村宝	相生町
	石田勝	州鼻
	枝川広行	西
	棟近咲治	
	檜原満行	
	武居博	光ケ丘
	土本薫	西
	浜崎一彦	東
	中原裕志	西
	近藤俊郎	大手町
	橋本（山本）貞子	緑ケ丘
	原田竹子	大阪

橋本（高木）マツエ　大島郡
藤井　ミサエ　防府
橋本（金近）信子　徳山
繁本（杉本）文子　徳山市櫛浜
原田（木戸）梅野　尾泊
玉井（浜田）ミヨ子　旭町
中原　忠志　物故者
村上　マスエ　〃

昭和二一年三月卒

原田　一政　東
原田　金伝　西
原田　一登　岩市
笠本　九二雄　西
橋本　静雄　横須賀市
棟近　徳一　尾泊
下村　一忠　久保岡市
武居　誠　恋ケ浜
三奈木　哲夫　中〃
西村　貞　櫛ケ浜横浜

三奈木（大塚）チエ子　広島県深安郡
原田（南）サチ子　徳山市周南団地
石田（杉谷）ヒロエ　田布施町麻郷
橋本（原田）ミサエ　平田西
渡辺　君江　下関
橋本（脇田）直子　東広島市西条
西村（土佐）隼野　大松ケ浦
橋本　広義　物故者
橋本　熊之進　〃
原田　政彦　〃

昭和二二年三月卒

橋本　孝道　東
東風浦　清　西
繁本　一美　東

昭和二三年三月卒

土本　幸平　旗岡
石田（原田）昇　瀬戸
原田　徳男　中
石田　孝　瀬戸
村上　秀光　西

土本　正男　松中町
河村（平松）トミ子　大津市
枝川（村上）五月江　京都市左京区
中原（大下）寿恵　光市立野
原田　ツタエ
橋本　照子　東京都
三奈木（山本）八重子　米川高垣
中原（角谷）美津子　昭和団地
相本　勇美子
原田　誠　物故者
中原　昭善　〃
西村　東　〃
盛田　巌　〃

橋本　貞幸　尾泊
西村　倉政　中
中原　勝智　中
木戸　徳美　尾泊
弘中　弘　西

卒業年度氏名	現住所
中原隆芳	徳山市城ケ丘
橋本（兼森）澄子	光
原田田鶴子	汐見町
下村（伊藤）イツエ	米川
浜崎（藤村）一恵	宇部市
石田政江	
棟近（武居）春美	光ケ丘
原田（下村）邦子	中
原田麗子	
土本（林本）由紀子	小郡
村上（泉原）悦子	神田町
三奈木律子	中
土本修一郎	物故者
藤井辰男	〃
岡村義幸	〃
原田綾野	〃

昭和二四年三月卒

卒業年度氏名	現住所
村上哲彦	橋本清秀
	柳井市
	中原昭治
	岡ノ原
	橋本正治
	中
	石田力
	瀬戸
	原田国夫
	旗岡
	石田等
	呉市焼山町
	枝川（中村）清美
	岩国市
	土本良雄
	旗岡
	橋本章治
	東京都
	中原宏一
	久保山田
	橋本敬治
	柳井市
	藤井（原田）武志
	新潟県
	村上年雄
	武居進
	旗岡
	繁本唯男
	原田昭子
	大阪
	原田利枝
	橋本（小松）カズ子
	半上

昭和二五年三月卒

卒業年度氏名	現住所
橋本則次	東京都
木戸信夫	花岡
橋本（笠本）善一	西
原田忠	光市戸仲
原田幸彦	旗岡
三奈木賢治	東
三奈木徳治	
橋本一二	楠木町
橋本宗夫	中
岡村彰	松神町
河村光水	倉敷市連島
中原定彦	西
村上忠宏	西
浜崎光孝	防府
中原（矢野）菊乃	深浦
土本（鬼武）益美	西柳
西村マツエ	新南陽市
藤井悦子	中市

橋本　浅江　名古屋
村上（川本）笑子　広島市南段原町
村上（福原）幹子　生野屋
橋本　好恵　大津島
三奈木（清木）エイ子　栄町

昭和二六年三月卒

橋本　澧子
相本　美代子
村上　若江
佐古　規子
武居（岩本）テル子　田布施
石田　敏　物故者

昭和二六年三月卒

中原　正幸　桃山団地
石田　忠幸　恋ヶ浜
三奈木　一春　寺迫
石田（室伏）博　切山中
村上　法彦　徳山市
中原（矢野）喜久美　深浦
下村（武居）利代子　藤光

橋本（下村）シズエ　平田
中原　恵子　東京都
岡村　幸子　大海町

昭和二七年三月卒

土本　菊男　西
橋本　光政　西
石田　敏明　光市
枝川　行広　岩国市
橋本　敦義　東
山中　輝幸　西
中原　和子　深浦
橋本　和江　神戸
浜崎（月輪）輝子　広島市観音新町
石田　和子　居守
河村（江本）久代　光市島田林
原田　絹枝　瀬戸
繁本（相本）若子　幸町
原田（武居）佐恵子　汐見町
棟近（藤本）美津枝　田布施町末郷
村上（豊高）百合子　広島県
三奈木（栗城）久子　神奈川県川崎市
土本（田村）久江　徳山大島
中原（東風浦）キヨノ　西
二家本　八十三　徳地町
土本　博光　物故者
橋本　伊佐子　〃

昭和二八年三月卒

石田　修高　砂町
石田　実　滋賀県草津市
東風浦　一美　東風浦
中原　一二
橋本　次雄　花岡
橋本　敏美　東
浜崎　武男　防府市
原田　文利　光
藤中　保一
三奈木　寅男　東
下村（東）睦子　徳山大島

卒業年度	氏名	現住所
	中原（河村）和子	高塚
	中原（友松）礼子	大阪市東成区
	西村（原田）文子	中
	橋本和子	
	橋本幸枝	大阪
	原田(東風浦)百々代	西
	藤井（武居）早子	豊井
	村上妙子	
	山本（藤田）隆子	広島市
昭和二九年三月卒		
	石田公男	光市浅江
	石田重幸	瀬戸
	枝川一美	小深浦
	岡村光男	
	木戸光行	花岡生野屋
	西村音春	
	橋本恒美	楠木町
	橋本照彦	旗岡

卒業年度	氏名	現住所
	原田健一	中
	原田旭	尾泊
	三奈木重行	小深浦
	山中義征	中
	相本（原田）寛子	光市
	下村福恵	豊・井
	中原芙美子	光市
	橋本（中原）里枝	桃山団地
	橋本洋子	中
	橋本洋子	光市
	原田加代子	
	三奈木幸枝	
	棟近千恵子	
	村上（石田）喜美子	瀬戸
	山中（原田）百合子	大島郡橘町
昭和三〇年三月卒		
	岡村義秀	大海町
	金本勇治	

卒業年度	氏名	現住所
	下村尚則	熊毛町白石
	武居信明	
	中原勝志	西
	二家本光昭	福川
	橋本栄幸	東京
	橋本篤見	
	橋本正	
	原田弘文	光市
	三奈木照正	花岡
	浜田芳男	
	石田桂子	防府市野島
	岩崎喜美代	大阪
	中原（小野）久美子	高砂町
	中原信子	
	原田冨士子	
	橋本（山本）里子	尾泊
	橋本（田中）美代子	大海町
	平山美也子	
	藤井和子	横浜市

山中信子　防府
木戸栄子　宇部市
橋本（川西）冨子　西岐波
橋本（武居）静子　旗岡
橋本（日柳）由起子　松神町
村上喜代美　花岡
三奈木（川崎）徳子　東光寺
下村節子　室積
村上広子　旗岡
石田久江　大阪
原田敦子　物故者
河内山睦子

昭和三一年三月卒

橋本松重
原田久継　西
原田一志　東
村上勝正
中原正雄　東

昭和三二年三月卒

中原藤男　花岡
石田義久　花岡時宗
橋本春男
枝川正勝　中
笠本憲二　法蓮寺
金本武生　大阪府寝屋川市
石田秀雄　花岡生野屋
沢田義昭
橋本澄枝
武居一英
武居（村田）絹代　岡ノ原
西村政文　西
枝川（弘中）勝枝　荒神
村上賢正　岩国市
相本つきみ
山本繁尾　泊
橋本（紅谷）綾子　西
大谷（清木）勝代　平田
土本千恵子　西〃
東風浦（大石）光江　江ノ浦
岡村須磨子
土本（松永）秀子　光

昭和三三年三月卒

枝川一則　中
下村武司　船橋市
西村春雄　水島島
橋本隆雄　中
橋本勉　下香力
三奈木幸男　中
大瀬戸敬司
枝川（島本）弘子　西開作
原田友江　小郡
原田（小林）博子　大手町
原田萬里子　下関
村上希代　新南陽市

卒業年度	氏名	現住所
昭和三四年三月卒		
	石田照男	瀬戸
	石田満	瀬戸
	枝川流一	
	木戸貞義	西
	河内山宏	
	下村治	
	中原哲美	
	浜崎正雄	久留米市
	原田鉄春	
	原田輝夫	生野屋東時宗団地
	藤井（菅）幹夫	
	三奈木忠雄	小深浦社宅
	三奈木哲	
	村上勝美	生野屋東中村
	山中等	
	岡村孝子	光市
	中原カツ枝	
	中原康代	末光社宅

卒業年度	氏名	現住所
	原田綾子	東
	原田（林）美智子	光市島田
	原田美保子	西
	古岡スエ子	尾泊
	盛田冨士枝	福山市
	山中（浅谷）冨美子	旗岡
	山本美智子	
	村上（石田）洋子	西
昭和三五年三月卒		
	岩崎定彦	徳山
	岡村敏明	
	大瀬戸俊二	
	笠本尚志	瀬戸
	中原郁夫	西
	中原信義	中
	中原等	
	橋本照昌	櫛ケ浜
	橋本透	大手町

卒業年度	氏名	現住所
	橋本秀夫	中
	橋本優	中
	原田克己	中
	原田誠一郎	北九州市
	原田武志	
	原田寿博	中
	原田光雄	西開作
	原田重雄	中
	三奈木正幸	松中町
	土本信子	
	中原（浜田）春美	
	藤井京子	旗岡
	藤井キヨ子	都町
	原田千津子	
	武居ミサオ	中
	村上美津雄	物故者
昭和三六年三月卒		
	枝川文夫	岩国市

石田哲次
岡村道治
河内山義章
西本幸男　西
橋本　強　東
原田繁秋　東
原田　博　東
原田保幸光　市
溝内　彰　西
村上菊男平　田
山本俊和　西
山中明美　西
石田小夜子　花岡生野屋
石田（梅田）万里子　西開作
岩崎孝代
岡村（山本）八重子　東
東風浦（中原）文枝
佐古恵子
中原文枝光　市
西村（西本）幸子

橋本牧子　大阪
原田ヒロ子　徳山市
原田美恵子　橋本町
原田由美子　広島
三奈木定子
中原（藤井）道代　中
山本真喜子

昭和三七年三月卒

原田雄二
浜崎万治　花岡
西本　彰
笠本一男　瀬戸
中原道雄　旗岡
三奈木俊次
原田（中村）照子　広島
橋本妙子　長崎
武居静江　岡山
中原ともえ　豊井
中内淳子

中原京子　富田
村上（安達）広恵
藤井多美子　中
原田春昭　物故者
村上保明　平田
村上則人　大阪府牧方市
山中伝人　中
中原俊治　西

昭和三八年三月卒

橋本育雄
原田義則
笠本幹夫　瀬戸
西村敏勝　山口市
岡村秀夫
東風浦良一　東風浦
原田正義
木戸正義
橋本義明　東
原田俊信　東

卒業年度	氏名	現住所
	山本　みな子	
	枝川（島本）小液子	熊毛町呼坂
	橋本　幸子	大阪
	中原（原）和恵	
	山本　広子	岡山
	原田　輝子	光市
	中原　美千代	江ノ浦
	下村（武居）綾子	幸町
	宮西（山本）香代子	
昭和三九年三月卒		
	岩崎　勇次	光市浅江
	田中　正昭	
	下村（原田）豊	西
	谷　弘貴	奈良県生駒郡
	橋本　好博	東
	原田　良雄	中
	原田　正俊	
	西村　正治	

卒業年度	氏名	現住所
	西本　英雄	西
	村上　謙治	久保東和
	武居　美津江	中
	中原　里美	
	中原（原田）艶子	西柳
	橋本　ツヤ子	中
	原田（小田）多都子	松神町
	原田　照代	徳山市
昭和四〇年三月卒		
	中原　明夫	
	中原　勝育	中
	西本　寿美雄	西
	西本　満也	奈良県生駒郡
	橋本　繁政	中
	原田　昭之	東
	藤井　幸正	西
	山本　進	尾泊
	山本　富雄	西

卒業年度	氏名	現住所
	渡辺　一	寺迫
	岩崎　芳江	大阪
	岡村　まゆみ	大松ヶ浦
	武居　春江	中
	中原　のり子	小深浦
	原田（野村）香恵子	徳山市
	原田（長谷）弥恵子	江ノ浦社宅
	原田　幸枝	瀬戸
昭和四一年三月卒		
	岩崎　悟	光市
	岩崎　忠和	光市
	笠本　信雄	
	下村　孝治	大阪
	武居　英春	東
	中原　浩二	東風浦
	中原　孝幸	尾泊
	三奈木　正紀	下関市
	古本（坪江）清水	徳山市大内町

下村（野村）美恵子　中
谷　美貴子　千葉県市原市
中原　智恵子　東
西村（岡部）昌子　大松ヶ浦
橋本（福井）恵子　光市御崎町
原田　豊子　東

昭和四二年三月卒

東風浦　利雄
西本　勝　西
橋本　晃一　東
原田　梅春　東
原田　政博
山本　徳雄　西
宮西　五夫　尾泊
内山（福本）知津枝
下村　志保子　中
藤井　啓子　西
渡辺　恵子
渡辺（勝屋）ゆみ子　徳山市

昭和四三年三月卒

下村　利宏　中
中原　要　中
原田　真喜雄　東
村上　良喜
山本　博充　尾泊
渡辺　義隆　中
中原（藤田）祥子
中原　民子　東
原田　芳衣　尾泊
村上（清木）弘美　中

昭和四四年三月卒

内山　健治　中
中原　隆志　西
橋本　清則　横浜市
村上　伸之　東
武居　加良子　西
原田　範子　東
藤井　正子　西

昭和四五年三月卒

内山　洋二　中
武居　由希彦　西
西村　良美　中
橋本　達弥　中
原田　淳　中
村上　博英　西
三奈木　薫　西
宮西　六之　広島県
中原　みどり　東
西村　和子　中
原田　康世　尾泊
村上　忠子　東

昭和四六年三月卒

東風浦　道男　東風浦
岡村　まゆみ　東風浦
木戸　千江美　尾泊
東風浦　敬子　東風浦
中原　恵子　東風浦

卒業年度氏名	現住所
中原　ひとみ	東風浦
橋本　一枝	東
浜崎　茂子	東

昭和四七年三月卒

卒業年度氏名	現住所
原田　太加雄	泊
内山　美知代	中
東風浦　博子	西
中原　美由紀	西
橋本　弘子	東
早本　千恵美	中
原田　直美	尾
村上　忍	西

昭和四八年三月卒

卒業年度氏名	現住所
下村　孝宏	中
中原　清	東
村上　敦彦	東
岡村　幸枝	東
河村　朝美	西
中原　雪子	東風浦
浜崎　理智子	東
宮西　早美	尾泊

昭和四九年三月卒

卒業年度氏名	現住所
笠本　敦志	西
東風浦　光政	西
中原　正義	東
西村　直美	中
原田　義宏	瀬戸
棟近　信明	尾泊
枝川　二三代	西
原田　まめみ	東
橋本　美恵子	中
三奈木　幸子	中
村上　由起美	西

昭和五〇年三月卒

卒業年度氏名	現住所
原田　道幸	瀬戸
中原　美智子	東風浦
岡村　政子	東
三奈木　智子	中
中原　由美子	中

昭和五一年三月卒

卒業年度氏名	現住所
石田　一志	瀬戸
大村　康	西
木戸　光夫	尾泊
橋本　浩之	東
橋本　幸夫	東
原田　清人	東
原田　義雄	東
西村　明美	中
棟近　幸恵	尾泊
村上　美代子	西

昭和五二年三月卒

枝川敏之　西
笠本丘生　西
笠本嘉成　西
東風浦清広　西
土本耕三　西
中原康男　中
西村譲　中
原田隆之　中
村上静香　西

◇在校生児童名簿

一年生

橋本直樹	東地区
原田光洋	中〃
紅谷幸也	西〃
三奈木孝則	東〃
石田真智子	西〃
原田美幸	東〃
弘中祥予	西〃

二年生

石田重和	瀬戸地区
石田進	〃
橋本孝文	東地区
橋本秀幸	尾泊
橋本浩志	中地区
原田一隆	東〃
原田誠	中〃
三奈木浩二	東〃
村上優子	西〃

三年生

石田敦士	西地区
中原正博	西〃
橋本健太郎	西〃
橋本典	東地区
山本則幸	尾泊地区
橋本敬子	中地区

四年生

石田知昭	瀬戸地区
東風浦秀美	西〃
下村雄二	中〃
橋本敏明	中〃
早本一則	中〃
原田晃雄	西〃
弘中章文	西〃
三奈木高雄	東〃

四年生

三奈木	信彦	東地区
三奈木	恵	西〃
山中	伸明	〃
中原	美鈴	東風浦地区
西村	玲子	中地区
原田	郁子	瀬戸地区
山本	ひとみ	尾泊地区
村上	ひろみ	〃

五年生

笠本	央	西地区
東風浦	隆男	西〃
東風浦	義和	東風浦地区
土本	祐之	西地区
石田	朱美	
石田	直子	
枝過	和子	
東風浦	育子	
中原	すみ子	東風浦地区

六年生

橋本	玲香	東地区
石田	浩	瀬戸地区
河村	直久	西地区
下村	克之	中〃
西村	靖雄	中〃
西本	文雄	西〃
原田	道隆	東〃
弘中	和宏	西〃
三奈木	重正	東〃
東風浦	美佐子	西〃
橋本	真理子	東〃
橋本	三千代	中〃

付

録

笠戸小学校創立100周年記念事業趣意書

各位

青葉の候　みなさまには、ますますご清祥のこととお慶び申し上げます。

さて、わたしたちの母校笠戸小学校は今年3月3日をもって創立100周年を迎えました。

顧みますと創立当時は明治の初期で、地区に不学の家を作らず、諸外国におくれをとるまいとする悲願のもとに開校されたものでありました。

その後、幾星霜の年月は流れ、その間に不撓不屈の向学心に燃える千有余の学童をおくりだし、小規模校ではありながら、常々学校と地区父兄が一体となり、他校におくれをとらない英才を輩出してその実績を高く評価されておりますのは、みな様方のおかげだと感謝しております。

このたび、この笠戸小学校の開校百年記念の事業として、母校の発展を願う有志によって、下記の記念事業と行事を計画することになりました。

みなさまにおかれましては、いろいろとご出費のかさむ当今であり、その上、小中学校義務教育での父兄負担軽減についての教委当局のご指導を受けておる折ではありますが、限りなく発展していく笠戸小学校の将来のための一節として、百年記念事業行事への深いご理解のもとにご協賛くださるよう伏してお願い申しあげます。

記

○記念事業

- 百周年記念校誌　　・同窓会名簿
- 教育環境の整備

○記念行事

1. 記念・大運動会・発表会・展示会等（52年9月末）
2. 100周年記念式典（52年11月初旬）

昭和52年5月1日

下松市立笠戸小学校創立100周年記念事業実行委員長

土　本　　薫

領　収　書

殿

一金＿＿＿＿＿＿円也

上記金額確かに領収いたしました。

昭和52年　月　日

下松市立笠戸小学校創立100周年記念事業実行委員長

土　本　　薫

取扱者氏名　　印

附1

笠戸小学校創立百周年記念事業

事業計画と予算

(一) 事業計画

小規模校ながら、伝統ある笠戸教育の一節のしめくくりと、将来への限りなき飛躍を願う地区民協調のしるしとして。

一　戸数　一四三戸　自治会長
二　人口　六二五名　原田清義
三　学校職員数　一〇名　校長　佐々木雄造
四　児童数　五九名　会長　土本　薫
五　ＰＴＡ会員　四六名

準備委員会設立　昭和五一年三月

企画力他優秀で、実践力有る人とされ、各団体長、同窓生代表を主体とした。

実行委員会設立　昭和五一年八月

委員長　土本　薫
副委員長　河村多喜夫
同　原田博光
同　橋本京子
事務局長　山本律子　（柳　章　転任）
事業部長　橋本弥恵次
編集長　武居謹一
会計部長　三奈木　博
ＰＴＡ専委　橋本孝道、橋本正治、橋本光政
委員（部付）笠本九二雄、三奈木賢治、橋本洋子
顧問、委員、学校職員　以上総勢　四〇名

(二) 事業　（募金と併行すべく）

一　記念誌（含同窓会名簿）

校友、同志の旧交を温存するきずなとしながら、愛郷、愛校心を高めるため。

二　教育環境の整備

記念碑建立、植樹、文化用機器

無限の未来への発展を願って、百年の足跡を残す。

(三) 記念行事

記念式典・祝賀会、記念運動会、他

予算表

項目	金額
記念誌（卒業生名簿を含む。）	５０万
記念石碑	３０万
記念植樹	２０万
式典	２０万
記念品	４０万
事務費	１５万
予備費	１５万
計	１９０万

参考文献一覧（順不同）

防長地名淵鑑　御薗生翁甫
山口県文化史年表　山口県編
大下松大観　下瀬松雪
下松地方史研究　下松地方史研究会
防長歴史暦　山口県
防長風土注進案　都濃郡宰判
校誌　公集小学校
須磨・楽々谷小学校百年史　須磨小学校
市民くらしのしおり　下松市（三五周年）
末武南村郷土誌　木村初五郎
山口県の歴史　山口県
都濃郡誌
校誌（創立百周年記念）　下松小学校
笠戸九〇年誌　笠戸小学校

明治四五年三月

大正二年三月

大 正 三 年 三 月

大 正 四 年 三 月

大正五年三月

大正六年三月

大正七年三月

大正八年三月

大正九年三月

大正十年三月

大正十二年三月

大正十三年三月

大正十四年三月

大正十五年三月

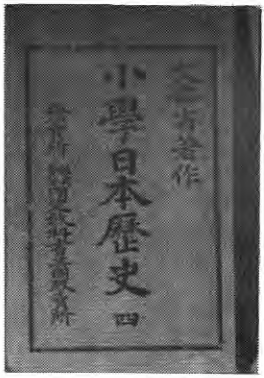
昭和二年三月

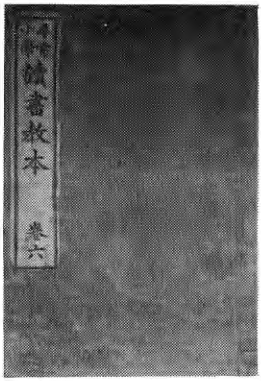
昭和三年三月

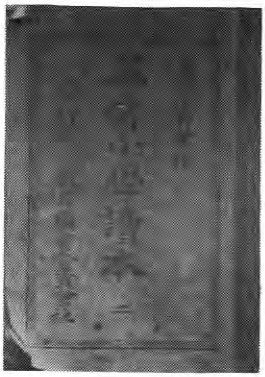
昭和四年三月

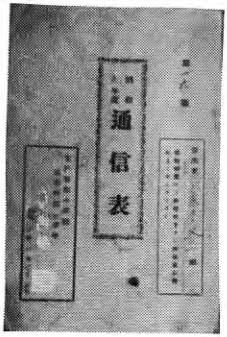
昭和五年三月

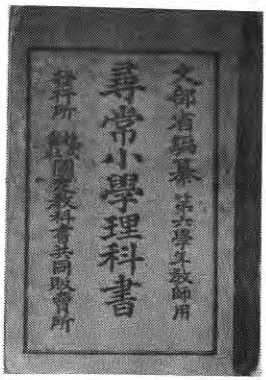
國語讀本
尋常小學校用
巻八

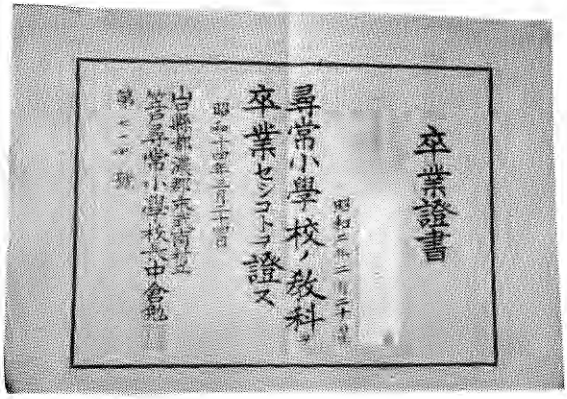

小學日本歷史
四


讀書教本
巻六




通信表


尋常小學理科書



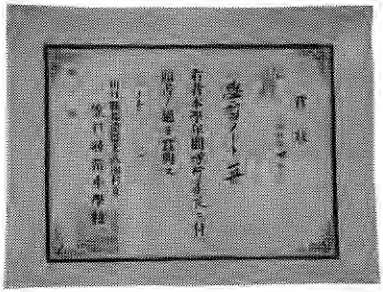
卒業證書

尋常小學校ノ教科ヲ卒業セシコトヲ證ス

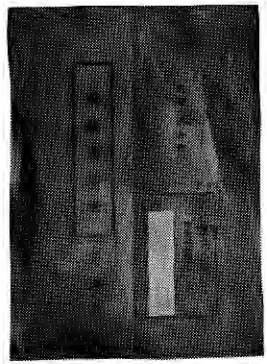
昭和二十年三月二十日

山口縣熊毛郡大和村立
笠戸尋常小學校長中倉勉

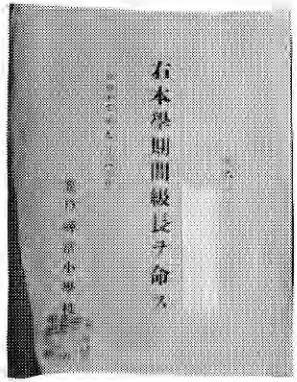
第七十四班



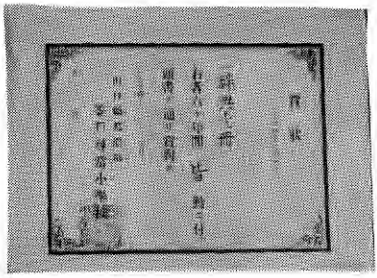
賞状



賞状



石本學期間級長ヲ命ス



賞状

編集後記

十年一昔といいますが、前回の九〇周年のときには離島であつたわが郷土も、百周年を迎えた今日では笠戸大橋の完成で、本土と結ばれたことにより、あらゆる面ですばらしく発展して来ております。

渡船が唯一の交通機関であつた笠戸島も、今では昔の思い出となりました。

三方を緑濃き山々に囲まれ、前方には紺碧の海に真紅のアーチを描いた笠戸大橋をうかべ、下松の市街の遠景が眺められるわが母校。

その母校のある笠戸島は、周南地方のリクリエーションの場としての国民宿舎「大城」、勤労者福祉センター「笠戸島ハイツ」、自然休養林や遊歩道等も完成し、更に本年八月一日からは国鉄の周遊地の指定も受けて、全国的にも有名になりつつあります。

今、笠戸島の新しい歴史は限りない郷土の開発と繁栄が期待され益々各方面から脚光を浴びようとしております。

瀬戸内海国立公園笠戸島の一角に、このように恵まれた自然の中に、創立百周年を迎え、各種の記念事業が着々と進められております中に私どもは、百周年記念誌の編纂にひたいを寄せておるわけです。

百年ということになると随分と昔のことになります。近代化のテンポの早い昨今では、時代の変遷に伴い百年の間には人間の記憶は次第に薄れてしまうのが人情の常でありましょう。その意味において、百年をくぎりに記念誌を作成して、古い記録を後世に残しておくことは有意義なことだと思います。その記念誌の作成にあたり、部落の古老や各年輩の方々に呼びかけて古い資料の提供や昔の思い出等広範囲に探し求めてまいりましたが、何分にも短期間のことであり、貴重なる資料の掘り起しが充分でなくご期待に副えないものとなつたことを編集にあたつたものの一人として深くお詫びいたします。

同窓生名簿も出来る丈詳細に調べ、有効に活用出来るよう努力いたしましたけれども、開校以来の同窓生の消息ということで住所など十分に調べることが出来ませんでした。しかしこれを機会に沢山の方々の友情の輪を拡げることが出来れば幸甚と存じます。

記念誌の作成にあたり、校長先生はじめ諸先生方古老の方々や実行委員の皆様方から絶大なるご協力ご支援を賜りましたことを厚くお礼申し上げます。

昭和五二年十一月

百周年記念誌編集長　武居謹一

昭和五二年一一月一三日印刷発行

笠戸小学校百年誌

発行　下松市笠戸本浦二〇九
下松市立笠戸小学校内
笠戸小学校開校百周年
記念事業実行委員会
電話　下松（〇八三三）
五二―〇一五九

印刷所　下松市松神町
睦美マイクロ株式会社
電話　下松（〇八三三）
四一―〇三〇五